

71

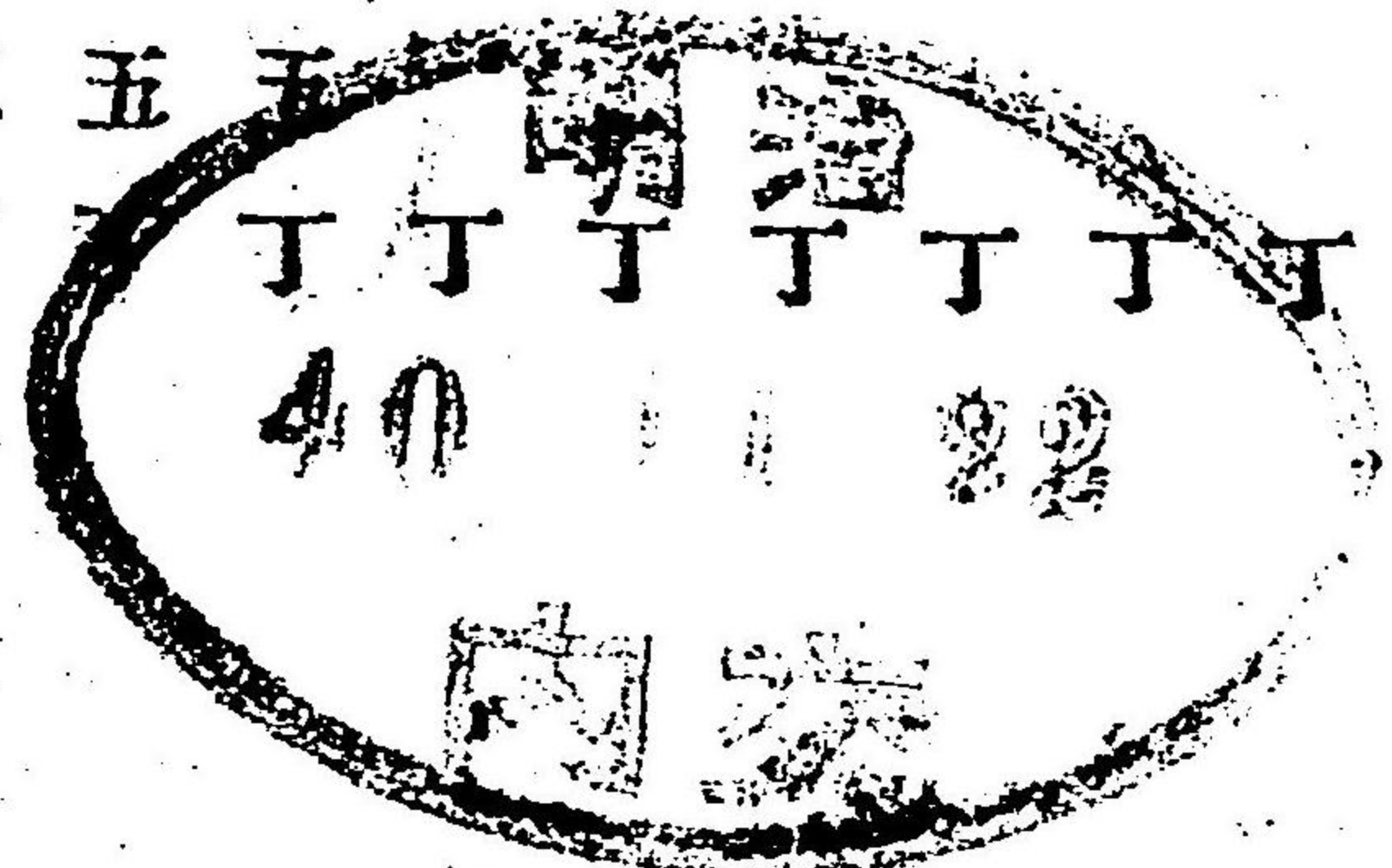
678

卷之七十一

野戰砲兵射撃教範改正草案目次

總則	一
第一部 射撃ニ關スル一般ノ定説	二
彈道ノ形狀及名稱	二
照準ノ考案	五
彈丸ノ効力	七
彈丸ノ構造	十
第二部 前導	十五
第三章 照準法	十五
總則	十五
表尺ヲ以テスル照準	十六
目次	一

一 丁
二 丁
二 丁
五 丁
七 丁
十 丁
十五 丁
十五 丁
十六 丁



特71
678

目次

方向照準	十九丁
高低照準	二十一丁
方向及高低照準	二十二丁
弧形照準機ヲ以テスル照準	二十二丁
高低照準	二十五丁
方向及高低照準	二十六丁
方向及高低照準	二十七丁
方向及高低照準	二十八丁
方向及高低照準	二十九丁
標桿ノ假標トスル照準	三十丁
方向照準	三十二丁
方向及高低照準	三十三丁

二

動目標ニ對スル照準	三十四丁
發火セル目標ニ對スル照準	三十五丁

第二章 照準手拔擢法

拔擢順序	三十五丁
撰拔擢検査法	三十七丁
褒賞	三十九丁

第三部 射撃

第一章 射法

總則	四十丁
射彈ノ觀測	四十丁
射撃ノ開始及施行	四十一丁
不動目標ニ對スル射撃	四十九丁
目次	五十六丁

三

目次

着發射擊	五十六丁
試射	五十六丁
齊射	五十八丁
曳火射擊	六十丁
試射	六十丁
齊射	六十一丁
動目標ニ對スル射擊	六十六丁
前進目標	六十七丁
退行目標	六十九丁
橫行目標	六十九丁
斜行目標	七十丁
近距離ノ目標ニ對スル射擊	七十丁

四

防楯ニ對スル射擊	七十三丁
氣球射擊	七十三丁
夜間射擊	七十五丁

第二章 射擊演習

總則

基本射擊	七十六丁
戰鬥射擊	八十二丁
中隊戰鬥射擊	八十四丁
大隊戰鬥射擊	八十五丁
聯隊戰鬥射擊	八十六丁
射擊ノ審査	八十八丁
射擊成果表ノ調製	八十八丁
目次	九十一丁

五

目次	六
監的哨及放列哨ノ勤務	九十七丁
射撃場ノ警戒	九十九丁
報告	百一丁

野戰砲兵射撃教範改正草案

總則

第一 射撃ハ砲兵戰團唯一ノ法ナリ故ニ砲兵ハ射撃ニ熟達スルニ非サ
 外ニ戰團ノ要求ヲ充テコト能ハス

第二 射撃ハ嚴肅ナル射撃軍紀ヲ遵守セル操砲及機宜ニ適セル射撃ノ
 指揮ニ由リテ始メテ良好ノ成績ヲ得ルモノトス

第三 射撃ハ目的ハ射撃ニ關スル教育ヲ完公ナラシメントスルニ在リ
 實射ハ平常屢施行スルコト難シ故ニ豫メ射撃ノ方法ニ習熟スルヲ最モ必
 要トス其要素ニ足ラズシテ漫ニ實射ヲ行フトキハ獨リ良好ナル成績ヲ
 得ザルルヲ以テ其弊害甚々大ナルコトヲ銘心ス可シ

總則

第一部 射撃ニ關スル一般ノ定説 彈道ノ形狀及名稱

第四

運動スル彈丸重心ノ過クル線ヲ彈道ト謂フ

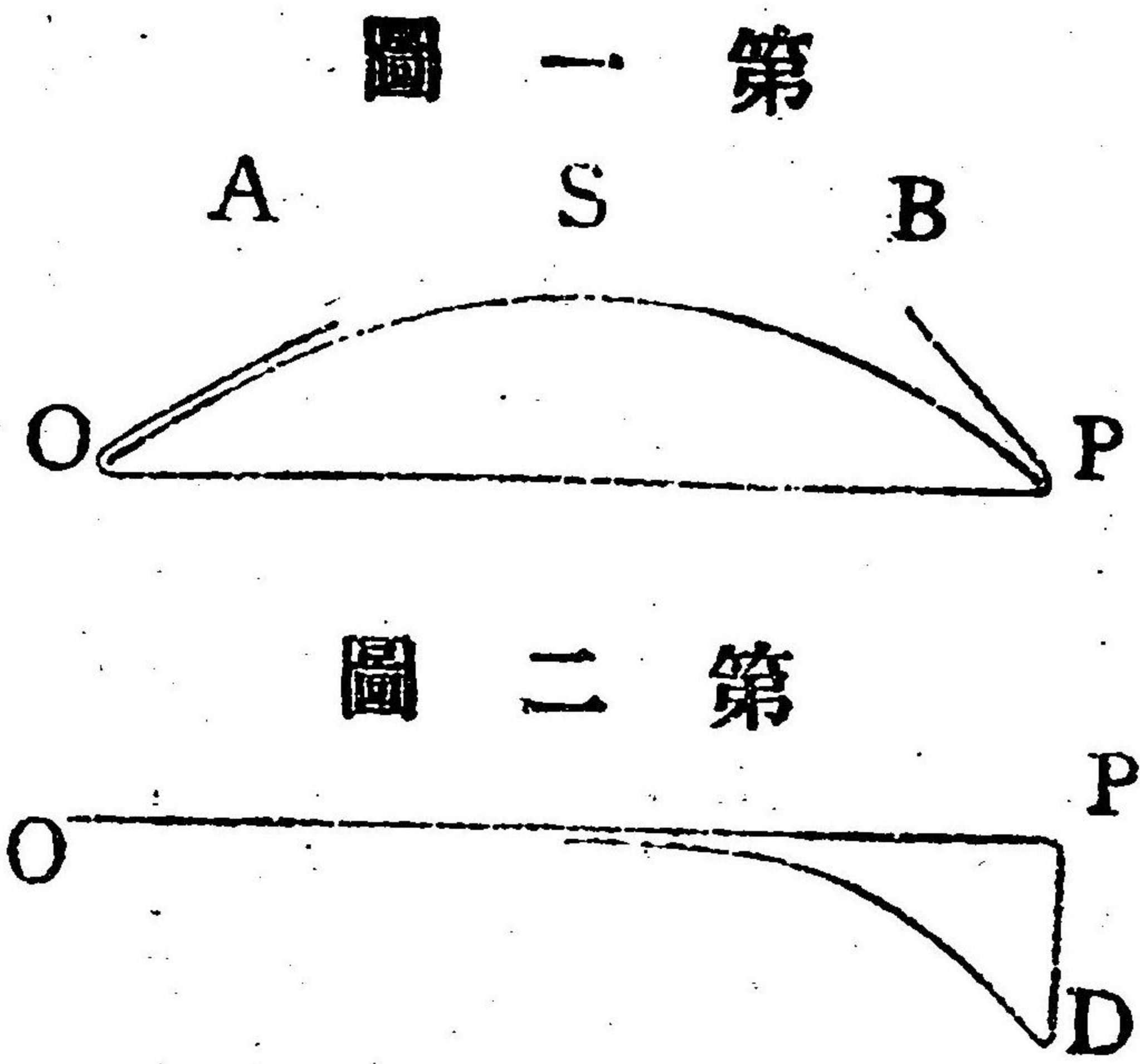
第五

彈丸火藥瓦斯ノ作用ニ由リ某速率ヲ以テ某方向ニ向ヒ砲口ヲ離ル、ヤ絶エス重力及空氣抗力ノ交感ヲ受ク之カ爲メ彈丸發起ノ方向ニ飛行スルコト無ク一ノ平面曲線ヲ成形ス可シ然レトモ尙彈丸ハ螺旋ノ爲メ旋回運動ヲ賦與セラル、ヲ以テ常ニ此平面曲線ノ一側ニ偏出シ爲メニ彈道ハ複曲率曲線ヲ成形ス

第六

砲身軸ノ延線OAヲ射線ト謂ヒ射線OAト水平線OPト成セル角AOPヲ射角ト謂ヒ射線OAヲ含ム垂直面ヲ射面ト謂フ

砲口Oヲ含ム水平面ト彈道SPトノ第二ノ交會點Pヲ落點ト謂ヒ彈道中最



第一圖

第二圖

射撃ニ關スル一般ノ定説

三

モ高キ點Sヲ最高點ト謂フ

砲口Oヨリ最高點Sニ至ル彈

道ヲ昇弧ト謂ヒ最高點Sヨリ

落點Pニ至ル彈道ヲ降弧ト謂

フ(第一圖)

彈道ノ最高點ハ常ニ砲口ヨリ

モ落點ノ方ニ接近シ降弧ノ彎

曲ハ常ニ昇弧ヨリ甚シ

落點Pニ於ケル彈道ノ切線BP

ト水平線OPトニテ成ス角BPOヲ

落角ト謂フ

落角ハ射角ヨリ大ニシテ距離

擊射ニ關スル一般ノ定説

四

ノ増加スルニ從ヒ二角ノ差ハ漸次増大ス
彈丸ノ旋回運動ニ由リ射面OPヨリ落點ノ偏出スル距離PDヲ定偏ト謂フ我
野砲及山砲ニ在リテハ共ニ定偏ヲ右方ニ生ス(第一圖)
各距離ニ應スル定偏ノ變化ハ距離ノ増加スル比ヨリ大ナリ

第七 彈道ノ地上若クハ目標ト交會スル點ヲ彈着點ト謂ヒ彈着點ヲ砲
口ニ連接セル線ト射線トニテ成ス角ヲ高角ト謂フ

彈着點ヲ砲口ニ連接セル線ト砲口ヲ含ム水平面トニテ成ス角ヲ高低角ト
謂ヒ此角砲口ヲ含ム水平面ノ上方ニ生スルトキハ高低角正ニシテ下方ニ
生スルトキハ負ナリ

高角ト高低角トノ和ハ射角ニ等シ

第八 彈丸砲口ニ於テ有スル速率ヲ初速ト謂ヒ彈道ノ某一點ニ於テ有
スル速率ヲ存速ト謂フ

存速ハ某限界ニ至ル迄ハ距離ノ増加スルニ從ヒ減却ス其減却ノ度ハ距離
増加ノ比ヨリ少シ

第九 砲口ヨリ彈着點ニ至ル距離ヲ射距離ト謂フ

彈道ハ地表面ニ對シ常ニ凹彎ヲ爲スヲ以テ彈丸ヲシテ目標ニ達セシメン
ニハ砲身軸ヲシテ常ニ目標ノ上方ニ通セシメサル可カラス故ニ同一初速
ヲ以テ同一彈丸ヲ發射スルトキハ射角ノ大小ニ由リ射距離ノ増減ヲ生ス
第十 發射ニ際シ彈丸砲口ヲ離ル、ノ瞬時ニ於テ彈丸飛行ノ方向ハ常
ニ砲身軸ト一致セスシテ小角度ヲ成ス之ヲ定起角ト謂フ我野砲ニ在リテ
ハ定起角ハ上方ニ山砲ニ在リテハ下方ニ生ス

第十一 彈丸砲口ヨリ彈着點ニ至ルニ要スル時間ヲ經過時間ト謂フ

照準ノ定義

射撃ニ關スル一般ノ定説

五

射撃ニ關スル一般ノ定説

六

第十二 照門ノ中心ト照星頂ニ亘ル線ヲ觀線ト謂ヒ觀線ヲ含ム垂直面ヲ觀面ト謂フ照門若シ表尺ノ零位ニ在ルトキハ特ニ之ヲ自然觀線ト謂フ

第十三 觀面ヲ所望ノ點ニ導クテ方向照準ト謂ヒ砲ニ所望ノ射角ヲ與フルヲ高低照準ト謂ヒ之ヲ綜合シテ行フヲ單ニ照準ト謂フ

第十四 直接ニ觀線ヲ目標ニ通シ得ルトキハ之ヲ直接照準ト謂ヒ之ニ反シ直接ニ觀線ヲ目標ニ通スル能ハサルトキハ之ヲ間接照準ト謂フ直接ニ觀線ヲ目標ニ通スル能ハサルモ目標ノ前後ニ在ル地物ノ媒介ニ由リ容易ニ觀面ヲ目標ニ通シ得ル場合ニハ之ヲ直接照準ト見做スコトヲ得

第十五 表尺ヲ裝定シ一點ヲ照準スルトキ觀線ト砲身軸ト成ス角ハ水平面上ニ在リテハ射距離ニ應スル射角然ラサルトキハ高角ニ等シ

弧形照準機ヲ裝定シ砲ニ角度ヲ與フルトキハ砲身軸ト水平線ト成ス角ハ

正ニ水平面上ニ於ケル其射距離ニ應スル射角ニ等シ

第十六 高低角アルトキ表尺若クハ弧形照準機ヲ同一距離ニ裝定シ前條ニ從ヒ照準スルトキハ此二者間ニ高低角ニ等シキ差ヲ生ス

弧形照準機ノ滑匣分畫級ニハ分畫ヲ刻シ高低角修正ノ用ニ供ス其一分畫ハ十六分ノ一度ニシテ射距離ノ千分ノ一ニ應スル砲口ト目標トノ高低差ヲ修正スルニ適ス而シテ高低角正ナルトキハ前へ負ナル時ハ後へ修正ス

第十七 横表尺ノ分畫ハ射線方向ヲ修正ニ用フ其一分畫ハ野砲ニ在リテハ自然觀線ノ千分ノ一山砲ニ在リテハ五百分ノ一ニ相當シ其零位ニ在ルトキハ恰モ觀面ト砲身軸ト相平行ス

彈丸ノ効力

第十八 榴霰彈ハ複働信管ニ由リテ地上ニ着發シ或ハ空中ニ破裂ス射撃ニ關スル一般ノ定説

七

榴霰彈ノ彈底信管ニ由リ着達シタル後爆裂ス

第十九 彈丸ノ空中ニ於テ破裂スル點ヲ破裂點ト謂ヒ目標ノ基脚ヨリ破裂點ニ至ル垂直高ヲ破裂高ト謂ヒ目標ヨリ破裂點ニ至ル水平距離ヲ破裂距離ト謂フ

榴霰彈彈着點若クハ破裂點ニ於テ破裂スルトキハ其彈子及破片ハ圓錐狀ヲ爲シテ前方ニ飛散ス其圓錐角ヲ束藁角ト謂フ

第二十 着發榴霰彈ノ効力ハ射距離ノ大小、目標ノ高サ及彈着點ト目標トノ距離ノ大小ニ由リ著シキ差異ヲ生ス又土地ノ抗力ハ著シク破裂ノ景況ヲ變化スルモノナリ

第二十一 曳火榴霰彈ハ破裂點ノ前方ニ於テ彈子及破片ヲ束藁角内ニ開散シ深長ナル地境ニ効力ヲ及ボス

曳火榴霰彈ノ束藁角ハ二千五百米ノ距離ニ於テ野砲ニ在リテハ約ネ十九

度山砲ニ在リテハ約ネ十三度トシ之ヨリ小ナル射距離ニ在リテハ漸次小ト爲リ之ヨリ大ナル射距離ニ在リテハ漸次大ト爲ル

第二十二 射撃表ニ示ス破裂高、破裂距離ヲ基本破裂高、基本破裂距離ト謂フ

野砲ニ在リテ千乃至四千米ノ射距離ニ於ケル基本破裂距離ハ八十乃至六十米、基本破裂高ハ二米五十乃至十五米トス

山砲ニ在リテ千乃至三千米ノ射距離ニ於ケル基本破裂距離ハ七十乃至六十米、基本破裂高ハ六乃至二十米トス

第二十三 破裂點正シク基本破裂高及基本破裂距離ニ合スルトキハ其効力最モ著シ破裂高ト破裂距離トノ比基本破裂高ト基本破裂距離トノ比ニ近ク且破裂高基本破裂高ノ二倍以内ナルトキハ尙充分ナル効力ヲ現ハシ得可シ破裂高甚タ高キカ若クハ破裂高ト破裂距離トノ比不良ナルト

射撃ニ關スル一般ノ定説

キハ効力充分ナラス

第二十四 曳火榴霰彈ノ効力ハ射距離小ナルニ從ヒ益著シ而シテ千五百米以内ノ射距離ニ於テ野砲ニ在リテハ破裂點チ距ル三百米ニ至ルモ尙充分ナル効力ヲ期シ得可シ山砲ニ在リテモ略之ト同一ノ効力ヲ有ス零距離ノ曳火榴霰彈ハ砲口前約ネ三十米ニ於テ曳火ス千五百米以内ノ距離ヲ射撃上特ニ近距離ト謂フ

第二十五 榴彈ハ榴霰彈ト略同一ノ彈道ヲ畫キ抗力アル物體ニ對シ著大ナル破壊力アリ

彈丸ノ集散

第二十六 同一火砲ヲ以テ同一景況ニ於テ數多ノ彈丸ヲ發射スルモ常ニ同一點ニ着達スルコト無ク某限界内ニ散飛ス而シテ其散飛ノ景況ハ

中央ニ近シクニ從ヒ密集ス又散飛帶ノ深サハ其幅ヨリハ著シク大ナリ散飛帶ノ深サチ射距離必中界ト謂ヒ其幅チ方向必中界ト謂フ又垂直目標ニ於テハ其高サチ高低必中界ト謂フ數多彈着點ノ中心チ平均彈着點ト謂ヒ此點ヨリ砲口ニ至ル距離ヲ平均射距離ト謂フ

平均彈着點チ中心トシテ發射彈數ノ半ヲ含ム限界チ半數必中界ト謂フ

第二十七 射撃表ニ示ス半數必中界ハ一火砲ヲ以テ施行セル射撃ノ結果ナリ故ニ數多ノ火砲ヲ以テセハ其平均彈着點各相異ナル可キヲ以テ必中界モ亦増大ス可シ六門ヲ以テ射撃スルトキ其半數必中界ハ通常射撃表ニ示スモノノ一倍半トス

第二十八 曳火榴霰彈ヲ發射スルニ方リ同一ノ信管距離及射角ヲ以テスルモ同一點ニ於テ破裂セズ其破裂點ノ偏差ハ主トシテ射距離ニ在リ

射撃ニ關スル一般ノ定説

テハ信管燃燒時限ノ遲速、高低ニ在リテハ信管燃燒時限ノ遲速及射角ノ誤差ニ關ス

破裂點散飛ノ深サヲ射距離破裂界、其幅ヲ方面破裂界、其高サヲ高低破裂界ト謂フ而シテ方向破裂界ハ殆ント方向必中界ニ等シ數多破裂點ノ中心ヲ平均破裂點ト謂ヒ其高サヲ平均破裂高其目標ニ至ル水平距離ヲ平均破裂距離ト謂フ

平均破裂點ヲ中心トシ破裂點ノ半數ヲ含ム限界ヲ半數破裂界ト謂フ

第二十九

平均破裂高基本破裂高ニ合スルモ尙稀ニ着發ヲ生スルコトアリ然レトモ六發ノ射彈中二發以上ノ着發彈アルトキハ平均破裂高ハ基本破裂高ヨリ著シク小ナリ

平均破裂距離基本破裂距離ニ合スルモ尙稀ニ破裂點目標ノ後方ニ在ルコトアル可シ而シテ六發ノ射彈中二發以上目標ノ後方ニ於テ破裂シタルト

キハ平均破裂距離ハ基本破裂距離ヨリ著シク小ナリ

第三十

射距離上平均彈着點ヲ變換スルニハ射角ノ増減ヲ以テス其増減ス可キ量ハ二十五米ヲ最小トス

第三十一

平均破裂高ヲ變換スルニハ信管距離ノ増減ヲ以テス其増減ス可キ量ハ二十五米ヲ最小トス

第三十二

方向上平均彈着點及破裂點ヲ變換スルニハ標尺若クハ方向分畫ノ移動ニ由ル

方向分畫ヲ用フルトキハ一分畫ノ修正分畫ハ角度分畫上ニ在リテハ射距離ノ約ネ千分ノ四十旋分畫上ニ在リテハ射距離ノ約ネ千分ノ三ニ應ス

第三十三

氣壓、溫度及濕度ノ爲メ變化スル空氣比重並ニ風ノ強弱方向ハ著シク射距離ニ交感ヲ及ホスモノナリ然ルニ信管燃燒時限ハ之カ爲メ交感ヲ受クルコト少キカ故ニ射距離ト信管距離トノ一致ヲ缺クニ至

射撃ニ關スル一般ノ定説

此差異ハ射距離ノ大ナルニ從ヒ益増加シ且通常夏季ニ於テハ高破裂冬季ニ於テハ低破裂ヲ生スルモノトス

第三十四 弧形照準機ヲ以テ射撃スルニ方リ高低角アルトキハ射距離ト信管距離ト一致セス而シテ高低正角ナルトキハ破裂點低ク若クハ着發シ高低角負ナルトキハ破裂點高シ

第三十五 風側方ヨリ吹クトキハ彈丸ハ側方ニ偏ス其量ハ風速大ニシテ射線ニ直交シ且射距離ノ増大スルニ從ヒ益大ト爲ル射線ト直角ニ吹ク風ノ交感ヲ修正スルニハ野砲ニ在リテハ風速三米山砲ニ在ツテハ風速八米ナルトキ射距離ノ料數ニ等シキ橫表尺分畫數ヲ風ノ來ル方ニ移ス

第三十六 砲耳軸水平ナラサルトキハ表尺側方ニ傾キ彈道モ亦砲耳軸ノ低下セル側方ニ傾クモノトス

砲耳軸ノ傾斜ヨリ生スル偏差ヲ修正スルニハ兩輪高低差ノ十糧ナルトキ

野砲ニ在リテハ射距離ノ料數ノ三倍山砲ニ在リテハ其六倍ニ等シキ橫表尺畫數ヲ高キ車輪ノ方ニ移ス

第二部 照準

第一章 照準法

總則

第三十七 火砲ノ威力ハ正確ニシテ迅速ナル照準ト確實ニシテ敏活ナル操砲ニ由リテ始メテ最大ナルモノトス故ニ照準ノ教育ハ操砲教練ト相俟テ訓練シ戰鬪諸般ノ景況ニ應シ毫モ遺憾無カラシムルニ至ルヲ要ス

第三十八 初歩ノ教育ニ在リテハ適宜ノ物體ヲ示シテ目標ト爲スモ漸次歩ヲ進ムルニ從ヒ成ル可ク實際ニ類スルモノヲ撰ミ小距離ヨリ逐次

照準法

大距離ニ及ホシ操砲教練ニ於ケル射撃ノ號令ヲ下シ照準具ノ裝定及照準操作ヲ併セ行ハシム可シ

第三十九

其火線トス

照準點ハ隊伍ニ對スルトキハ其下際堡壘ニ對スルトキハ

目標及照準點ニ關スル左右ノ稱呼ハ目標ニ面シテ之ヲ定メ「向テ右(左)」ト稱フ

第四十

トス

演習ヲ行フニ方リテハ砲手ヲ放列ノ定位ニ就カシムルヲ常

第四十一

照準法一般ノ教育ヲ終リタル後中隊長ハ兵卒中視力發達ノ見込無ク理解力ニ乏シク將來照準手ニ適セサル者ハ此演習ニ除名スルコトヲ得

表尺ヲ以テスル照準

第四十二

表尺ハ通常左ノ場合ニ使用ス

直接照準ヲ爲シ得ルニ方リ方向高低ノ照準ヲ同時ニ爲ス可キ一般ノ場合

弧形照準機ヲ以テ高低照準機ヲ爲スニ方リ方向級ヲ以テ方向照準ヲ爲サ、ルトキ

第四十三

表尺ヲ裝置スルニハ横表尺ノ分畫面ヲ後ニシ坐筒發條ヲ壓シテ表尺溝ニ挿入シ坐筒ノ支坐ヲシテ徐ニ表尺溝ノ上縁ニ密合セシム表尺ヲ抽出スルニハ坐筒發條ヲ壓シ表尺溝ヨリ抽出ス

第四十四

射距離ノ號令アリタルトキ表尺ヲ裝定スルニハ野砲ニ在リテハ一番砲手ハ右手ヲ以テ壓紙及誘導牝螺ヲ押ヘ左手ヲ以テ表尺頭ヲ撮ミ表尺幹ヲ略所望ノ高サニ抽出シ壓紙ヲ放チ右手ヲ以テ誘導牝螺ヲ旋回シテ所命ノ距離刻線ヲ正シ坐筒上縁ニ一致セシメ次ニ右手ヲ以テ螺

桿頭ヲ旋回シテ遊標ヲ左ニ移シ其矢標ヲ表尺高二應スル偏流數ニ等シキ分畫ニ合ス

山砲ニ在リテハ一番砲手ハ左手ヲ以テ駐螺ヲ緩メ右手ヲ以テ表尺頭ヲ撮ミ表尺幹ヲ略所望ノ高サニ抽出シ駐螺ヲ輕ク緊メ右手ヲ以テ轉螺ヲ旋回シ所命ノ距離刻線ヲ正シク坐筒上縁ニ一致セシメタル後駐螺ヲ緊定シ野砲表尺ノ如ク橫表尺ヲ合ハス

履飯ヲ用フルトキ表尺ヲ裝定スルニハ一番砲手ハ前項ノ要領ニ由リ表尺ヲ略最大距離ノ高サニ抽出シ履飯ノ射表飯ニ由リ所命ノ距離ニ應スル偏流數ヲ讀ミ橫表尺ヲ合ハス

第四十五 射距離ノ變換ヲ號令セラレタルトキハ所命ノ距離刻線ヲ坐筒上縁ニ移ス但野砲ニ在リテハ表尺幹ヲ上下スルニ右手ヲ以テ壓鉄及誘導牝螺ヲ押ヘツ其拇指ヲ表尺幹ニ當テ之ヲ略所望ノ高サニ移スコト

ヲ得

偏流ノ變換ヲ號令セラレタルトキハ先ツ橫表尺ヲ檢シ現ニ矢標ノ對スル刻線ヲ記憶シ此刻線ヨリ起リ號令セラレタル數タケ遊標ヲ左若クハ右ニ移ス但未タ表尺高二應スル偏流ヲ取リアラサルトキハ其數ヲ記憶シ之ニ所命ノ偏流數ヲ増減シ得タル數タケ遊標ヲ左若クハ右ニ移ス

第四十六 表尺ヲ零位ニ復スルニハ野砲ニアリテハ一番砲手ハ壓鉄及誘導牝螺ヲ押ヘ表尺幹ヲ表尺坐筒ニ全ク挿入シ次キテ橫表尺ヲ零位ニ復ス

山砲ニ在リテハ一番砲手ハ駐螺ヲ緩メ表尺幹ヲ表尺坐筒ニ全ク挿入シ駐螺ヲ緊メ橫表尺ヲ零位ニ復ス

方向照準

照準法

第四十七 表尺ヲ裝定シアルトキ三番砲手ヲシテ砲ニ方向ヲ與ヘシムル爲メ著明ナル物體ノ垂直線ヲ示シ(觀ヘ)ノ號令ヲ下ス
 三番砲手ハ砲車ニ面シ照準棍ヲ執リ架尾ヲ左右シテ遊標頭ト照星ニ亘ル垂直面ヲ示サレタル線ニ通セシムル如クス

第四十八 表尺ヲ裝定シアルトキ一番及三番砲手ヲシテ方向照準ヲ爲サシムル爲メ物體ノ垂直線ヲ示シ「觀ヘ」ノ號令ヲ下ス三番砲手ハ第四十七ノ如ク方向照準ヲ爲ス若シ遊標頭ヨリ照星ニ亘リ照準シ能ハサルトキハ弧形照準機ヨリ砲口頂ニ亘ル垂直面ヲ示サレタル線ニ通セシム
 一番砲手ハ照準ニ要スル姿勢ヲ取り暫時體ヲ右方ニ傾ケ三番砲手ノ操作終ラントスルヤ觀線ヲ延長ス
 一番砲手ハ觀線ノ方向左(右)方ニ偏スルトキ架尾移動ノ大小ニ應スル如ク左手ヲ以テ一側飯ノ右(左)側ヲ叩キ三番砲手ヲシテ架尾ヲ左(右)方ニ

轉セシメ適度ニ至レハ左手ヲ其側飯上ニス三番砲手ハ能ク一番砲手ノ手號ノ強弱ヲ察シテ架尾ヲ左右ス

第四十九 方向照準ヲ爲スニ方リ架尾ノ轉移大ナルトキハ一番砲手或ハ二番砲手ハ其方ノ軌履ヲ少シク扛ケ架尾ノ移動ヲ容易ナラシム

高低照準

第五十 表尺ヲ裝定シアルトキ一番砲手ヲシテ砲ニ射角ヲ與ヘシムル爲メ著明ナル物體ノ水平線ヲ示シ「觀ヘ」ノ號令ヲ下ス

一番砲手ハ照準ニ要スル姿勢ヲ取り觀線ヲ延長ス而シテ觀線示サレタル水平線ノ上(下)方ニ在レハ右手ヲ以テ轉把ヲ旋回シテ砲尾ヲ上(下)ク此時最初ハ觀線ヲ此線ノ稍下方ニ致シ轉把ノ小旋回ヲ以テ終ニ之ニ通セシム

方向及高低照準

第五十一

表尺ヲ裝定シアルトキ垂直水平二線ノ交截點ヲ示シ「觀
へ」ノ號令ヲ下ス

三番砲手ハ第四十七ノ如ク方向照準ヲ爲ス

一番砲手ハ三番砲手ノ操作終ラントスルヤ轉把ヲ旋回シ照準點ヲ照星ノ
稍上方ニ現ハサシメ要スレハ第四十八ニ準シ手號ヲ爲シテ方向ヲ正ス三
番砲手ハ之レニ應ジ架尾ヲ左右ス一番砲手ハ再ヒ轉把ノ小旋回ニ由リ觀
線ヲシテ全ク照準點ト一致セシム(第三圖)

方向照準ハ第四十七ニ準シ三番砲手ノミニテ行ハシムルコトヲ得

弧形照準機ヲ以テスル照準

第五十二

弧形照準機ハ不動目標ニ對シ通常左ノ場合ニ於テ砲ニ射
角ヲ與フル爲メ使用ス

直接照準ニ於テ目標ノ認識困難ナルトキ

目標ノ前後ニ在ル地物ニ由リ觀面ヲ目標ニ通スルトキ

間接照準ノ場合

第五十三

弧形照準機ヲ裝置スルニハ右手ヲ以テ照準機ノ前端左手
ヲ以テ其後端ヲ執リ分畫板ヲ後ニシ機ヲ坐飯ニ直角ニシテ裝着發條ノ孔
ヲ坐飯ノ駐釘ニ嵌メ之ヲ左方ニ旋ラシツ、兩手ヲ以テ少シク照準機ヲ上
ケ全ク之ヲ坐飯ニ裝置ス

履飯ヲ裝置スルニハ前項ト同一ノ要領ニ從ヒ坐飯ニ裝置シタル後駐螺ヲ
緊定ス

履飯ニ弧形照準機ヲ裝置スルハ全ク第一項ノ操作ニ同シ

第五十四 射距離ノ號令アリタルトキ弧形照準機ヲ裝定スルニハ一番砲手ハ轉鈕ヲ後方ニシ左手ヲ以テ誘導鉞ヲ撮ミ之ヲ扛ケ滑匣ヲ移動シテ指鉞ヲ略所命ノ距離刻線ニ致シ次キテ右手ヲ以テ滑匣ノ後端ヲ壓シツ、左手ヲ以テ轉螺ヲ旋回シ指鉞ノ前縁ヲ正シク所命ノ距離刻線ニ一致セシメタル後轉鈕ヲ舊位ニ復ス但指鉞ヲ距離刻線ニ一致セシムル爲メ滑匣ヲ後方ニ移ストキハ右手ヲ以テ其後端ヲ壓スコトナシ又豫メ高低角ノ修正ヲ爲シアルトキノ外指鉞ハ正シク滑匣分畫ノ零位ニ在ルヲ要ス履鉞ヲ裝置シアルトキハ弧形照準機ヲ裝定スルニハ一番砲手ハ履鉞ノ射表尺ニ由リ所命ノ距離ニ應スル角度分畫ヲ讀ミ前項ノ要領ニ從ヒ指鉞ヲ正シク角度刻線ニ一致セシム

射距離ノ變換ヲ號令セラレタルトキハ前項ト同一ノ操作ヲ爲シ指鉞ヲ所命ノ距離刻線或ハ角度刻線ニ移ス若シ其量小ナルトキハ單ニ轉螺ノミヲ

以テ滑匣ヲ移動スルコトヲ得

第五十五 高低角ヲ測ルニハ表尺ヲ以テ照準シタル後弧形照準機ノ轉鈕ヲ後方ニシテ滑匣ヲ適度ニ移動シ次キテ轉螺ヲ旋回シテ氣泡ヲ正シテ氣泡筒ノ中央ニ導キ轉鈕ヲ舊位ニ復シ更ニ指鉞壓螺ヲ緩メ指鉞ヲ移動シテ表尺ニ裝定セルト同一ノ距離刻線ニ正シク一致セシメテ指鉞壓螺ヲ緊メ指鉞ノ滑匣分畫零位ヨリ前(後)ニアルニ從ヒ滑匣分畫數ヲ「前(後)へ(何)度 幾何」ト讀ム可シ

第五十六 弧形照準機ヲ以テ高低照準ヲ爲スニ方リ方向照準ハ第五十一若クハ第四十七ニ準シテ行フ

高低照準

第五十七 弧形照準機ヲ裝定シアルトキハ一番砲手ヲシテ砲ニ射角照準法

照準法

二十六

ヲ與ヘシムル爲メ「觀ヘ」ノ號令ヲ下ス

一番砲手ハ右手ヲ以テ轉把ヲ旋回シ氣泡ヲ正シク氣泡筒ノ中央ニ導ク

第五十八

高低角ヲ修正スル爲メ「前(後)ヘ(何)度(幾何)」ノ號令アリタルトキハ滑匣ノ指鍼壓螺ヲ緩メ指鍼ヲ前(後)ニ移動シテ所命ノ分畫

ニ一致セシメタル後指鍼壓螺ヲ緊メ次キテ弧形照準機ヲ裝定ス

方向及高低照準

第五十九

表尺ヲ略所命ノ距離ニ定メ弧形照準機ヲ裝定シアルトキ目標ヲ示シ「觀ヘ」ノ號令ヲ下ス

一番及三番砲手ハ第五十一ニ準シ方向照準ヲ爲シ次キテ一番砲手ハ第五十七ニ從ヒ弧形照準機ヲ以テ砲ニ射角ヲ與フ
方向照準ハ第四十七ニ準シ三番砲手ノミニニ行ハシムルヲ得

方向鋸ヲ以テスル照準

第六十

方向鋸ハ不動目標ニ對シ通常左ノ場合ニ於テ假標點ノ媒介ニ由リ砲ニ方向ヲ與フル爲メ使用ス

砲車ノ附近ニ在リテ目標ヲ望見シ難ク且方向照準ヲ爲ス可キ適當ノ地物目標ノ前後ニ在ラサルトキ

第六十一

方向鋸ヲ裝置スルニハ脚桿ヲ角度鋸ト直角ニ起シ突筒ヲ後ニシテ表尺坐筒ニ挿入シ突筒ヲ表尺坐筒ノ準溝ニ嵌入ス

第六十二

方向鋸分畫ノ號令アリタルトキ方向鋸ヲ裝定スルニハ一番砲手ハ先ツ旋鋸壓螺ヲ緩メ指鍼ヲ所命ノ角度鋸分畫ニ一致セシメタル後其壓螺ヲ緊メ次ニ平鋸壓螺ヲ緩メ平鋸ノ矢標ヲ所命ノ數ニ一致セシメタル後其壓螺ヲ緊メ次ニ視鋸ト細糸鋸トヲ起ス

照準法

二十七

第六十三 方向飯修正ノ號令アルタルトキハ一番砲手ハ平飯壓螺ヲ緩メ矢標ノ一致セシ旋飯分畫數ニ號令セラレタル分畫數ヲ増(減)シ其量ニ應スル分畫ハ矢標ヲ正シク一致セシメ平飯壓螺ヲ緊ム

第六十四 假標點ハ鮮明ナル一點或ハ垂直線ニシテ成ル可ク砲車ヲ距ル遠ク不時ニ煙滅スルノ虞少キモノナルヲ要ス
適當ナル假標點無キトキハ標桿ヲ植立ス

第六十五 方向飯ヲ以テ方向照準ヲ爲スニ方リ高低照準ハ弧形照準機ヲ以テ行フ

方向照準

第六十六 方向飯ヲ裝定シアルトキハ一番及三番砲手ヲシテ砲ニ方向ヲ與ヘシムル爲メ著明ナル物體ノ垂直線ヲ示シ「觀へ」ノ號令ヲ下ス

一番砲手ハ旋飯ヲ略水平ナラシムル如ク關節壓螺ヲ緊定シ視飯ノ垂直孔ヲ通シテ細糸飯ノ細糸ト假標點ト一致スル如ク三番砲手ニ手號若クハ呼號ヲ與フ三番砲手ハ之ニ應シテ架尾ヲ左右ス

第六十七 目標ト假標點トノ間ニ生スル角ヲ測ルニハ表尺ヲ以テ砲ニ目標ノ方向ヲ與フルカ若クハ砲車ノ後方ヨリ通視シテ觀面ヲ目標ノ方向ニ通セシメ然ル後旋飯壓螺ヲ緩メ旋飯ヲ移動シテ假標點ヲ視視シ指鍼ヲ其最モ近キ分畫ニ一致セシメ旋飯壓螺ヲ緊定シ次ニ平飯壓螺ヲ緩メ平飯ヲ移動シテ正シク假標點ニ一致セシメタル後平飯壓螺ヲ緊定シ角度飯上ニ於テ其分畫數ヲ「何」分畫「旋飯上ニ於テ矢標ノ零位ヨリ左(右)方ニ在ルニ從ヒ其旋飯分畫數ヲ」左(右)「幾何」ト續ム可シ

方向及高低照準

第六十八

方向飯及弧形照準機ヲ裝定シアルトキハ假標點ヲ「觀へ」ノ號令ヲ下ス

一番及三番砲手ハ第六十六ニ從ヒ方向照準ヲ爲シ次キテ一番砲手ハ第五十七ニ從ヒ砲ニ射角ヲ與フ

標桿ヲ假標トスル照準

第六十九

標桿ハ不動目標ニ對シ通常左ノ場合ニ於テ方向照準ノ爲メ假標トシテ使用ス但標桿ニ代フ可キ適當ノ地物存在スルトキハ之ヲ使用シテ標桿ニ代フ

直接照準ニ於テ射擊間目標ノ認識困難ニ陥ルカ或ハ屢隱匿スルトキ觀線ヲ直接ニ目標ニ通スル能ハサルモ架尾ノ後方ヨリ觀面ヲ目標ニ導キ得ルトキ

方向飯ヲ以テ標準スルニ方リ觀面略目標ニ通スルニ至リタルトキ夜間ノ照準

第七十

觀線ヲ直接ニ目標ニ通シ能ハサルトキ砲ニ方向ヲ與フルニハ一番砲手ハ表尺ヲ畧所命ノ距離ニ裝定シ次ニ架尾ノ後方ニ至リ目標及照星ノ延線中ニ表尺ノ遊標頭ヲ位置セシムル如ク手號ヲ爲ス三番砲手ハ後方ニ向ヒ照準棍ヲ執リ一番砲手ノ手號ニ應シ左右ニ移動シ砲ノ方向ヲ定ム

第七十一

夜間標桿ヲ植立スルニハ「標桿」ノ號令ニハ五番砲手ハ標桿及提燈ヲ取り砲車ノ前方約ネ五十歩ノ所ニ出テ提燈ヲ標桿ニ縛シ砲車ニ面ス

一番砲手ハ表尺ヲ略所命ノ距離ニ裝定シ目標ヲ照準シ次ニ提燈ヲシテ觀面内ニ位置セシムル如ク呼號ヲ爲ス五番砲手ハ一番砲手ノ呼號ニ應シ右

左ニ移動シ適度ニ至レハ標桿ヲ地上ニ植立ス

第七十二

一般ニ標桿ヲ植立セル場合ニ在リテハ發射後砲車ヲ舊位ニ復スルコトニ注意ス可シ之カ爲メ車軸ノ一端ニ更ニ標桿又ハ所在ノ物件ヲ植立スルカ若クハ地物ニ由リテ砲車ノ位置ヲ標定ス

第七十三

標桿ヲ假標トスル照準ニ於テ其高低照準ハ弧形照準機ヲ以テ行フ

方向照準

第七十四

表尺ヲ裝定シ標桿ヲ植立シアルトキ一番及三番砲手ヲシテ照準ヲ爲サシムル爲メ「觀へ」ノ號令ヲ下ス

三番砲手ハ砲車ニ面シ照準棍ヲ執リ遊標頭ト照星ニ亘ル垂直面ヲ標桿上端ノ中央ニ通セシムル如ク架尾ヲ左右ス一番砲手ハ第五十一ニ準シ標桿

上端ノ中央ニ對シ方向照準ヲ爲ス

若シ後方ニ標桿ヲ植立シアルトキハ一番砲手ハ前身ノ右側ニ到リ後方ニ面シ照星ト標桿上端ノ中央ニ亘ル垂直面中ニ遊標頭ヲ位置セシムル如ク手號ヲ爲スニ番砲手ハ一番砲手ノ照準ヲ妨ケサル如ク標準棍ヲ執リ一番砲手ノ手號ニ應シ架尾ヲ左右ス此際要スレハ二番砲手ハ一番砲手ノ呼號ニ應シ轉把ヲ旋回シテ砲尾ヲ上下ス

方向及高低照準

第七十五

標桿ヲ植立シ表尺及弧形照準機ヲ裝定シアルトキ「觀へ」ノ號令ヲ下ス

一番及三番砲手ハ第七十四ニ從ヒ方向照準ヲ爲シ次キテ一番砲手ハ第五十七ニ從ヒ砲ニ射角ヲ與フ

第七十六 夜間ノ照準ニ在リテハ一番及三番砲手ハ第五十一ニ準シ前方ノ提燈ヲ照準點トシ次キテ一番砲手ハ弧形照準機ヲ以テ砲ニ射角ヲ與フ此間ニ番砲手ハ他ノ提燈ヲ用ヒテ照星及弧形照準機ヲ照ラス

動目標ニ對スル照準

第七十七 動目標ニ對シテハ表尺ヲ用フ

第七十八 敵線一タヒ目標ニ通スルヤ一番砲手ハ「良シ」ト呼ヒ照準成ルヲ報告シ爾後目標ノ運動ニ追隨シテ「第(何)」ノ號令アルマテ標準ヲ續行ス

目標橫行ノ速度大ナルトキハ一番砲手或ハ二番砲手ハ時々其方ノ軌履ヲ少シク扛ケ架尾ノ轉移ヲ容易ナラシム可シ

「第(何)」ニテ一番及三番砲手ハ起立シ發射ヲ準備ス

第七十九 照準中一番砲手ハ目標ノ停止、行進及隱匿スル等ニ應ジ「目標止ル」「目標動ク」「目標隱ル」等ニ呼ヒ之ヲ報告ス

發火セル目標ニ對スル照準

第八十 砲兵ニ對シ火光或ハ砲烟ノ外認識スル能ハサルトキハ一番及三番砲手ハ火光或ハ砲烟ヲ速ニ認識シ直ニ其位置ヲ記憶スルニ足ル可キ點ヲ撰ミ之ヲ以テ爾後照準ノ據點ト爲ス要スレハ標桿ヲ植立ス

第二章 照準手拔擢法

拔擢順序

第八十一 照準手ノ拔擢ハ毎年各中隊ニ於テ之ヲ行フ

第八十二 中隊長ハ各年期ノ兵卒中照準法ニ熟練シ且性質照準手トス

照準手拔擢法

照準手拔擢法

ルニ適スト信認スル者約十名宛ニ就キ射擊演習ニ先チ左ノ科目ニ由リ撰
拔検査ヲ行フ

表尺ヲ以テスル照準

弧形照準機ヲ以テスル高低照準

三番砲手ノ行フ方向照準

此検査ニ於テ各科十四點以上ヲ得タル者ノ中總點數ノ順序ニ從ヒ十五名
(各年期約五名宛)ニ撰拔照準手ヲ命シ之ヲ軍隊手牒ニ記入ス
總點數相等シキ者アルトキハ表尺ヲ以テスル照準ノ點數ニ由リ其順序ヲ
定メ尙此點數相等シキ者アルトキハ之ヲ復行ス

第八十三

中隊長ハ撰拔照準手列序表(第二表)ヲ製シ大隊長ヲ經テ
聯隊長ニ呈シ聯隊長ハ之ヲ師團長ハ當該旅團長ヲ經テ
ニ進達シ其人名
ヲ隊中ニ布達ス

撰拔検査法

第八十四

野砲標的(第四圖)ヲ約二千米ノ所ニ置キ目標ト爲ス

表尺ヲ以テスル照準

砲隊鏡ニ蛛網ヲ十字ニ張り之ヲ砲身ニ縛
着ス

検査官ハ先ツ表尺ヲ以テ目標ヲ照準シ次ニ轉把ヲ旋回シテ鏡ヲ略水平ナ
ヲシメ此鏡ノ延線上七十字ノ所ニ標板(第五圖)ヲ植立シ成ル可ク其中央
ヲシテ鏡ノ十字ト合セシメ其點ヲ記憶ス而シテ表尺高要スレハ横表尺ヲ
モ移動シ觀線ヲシテ照準點ニ一致セシメ検査ニ用フル表尺ヲ決定ス
以上ノ照準終レハ検査官ハ架尾ヲ側方ヘ移動シ轉把ヲ旋回シ表尺高ヲ零
位ニ置キ且横表尺ハ所用ノ偏流ト二個ヲ差ヘ然ル後「(何)千(何)百ニツ
右(左)ヘ」次ニ「觀ヘ」ノ號令ヲ下ス但表尺ハ検査準備ニ於テ得タルモノ

照準手拔擢法

照準手拔擢法

ナルヲ要ス

「觀へ」ニテ一番砲手ハ表尺ヲ裝定シ三番砲手ト協力シテ照準ス
検査官ハ十八秒ノ終リニ「止メ」ノ號令ヲ下シ砲隊鏡ヲ覗キ其十字ハ何レ
ノ點ニ在ルカヲ確認シ曩ニ記憶セシ點ヨリ起算シ一種ノ略近數ヲ以テ高
低方向ノ量ヲ測リ連續五回施行ノ後高低方向ノ平均誤差ヲ加へ之ヲ二分
ス

弧角照準機ヲ以テスル高低照準

砲隊鏡ノ十字ヲ標板ノ橫軸

ニ合セシメ弧形照準機ヲ以テ射角ヲ測リ要スレハ指鍼ヲ移動シ検査ニ用
フル距離刻線ヲ決定ス次ニ轉把ヲ旋回シ弧形照準機ノ滑匣ヲ零位ニ置キ
然ル後「何」千「何」百「觀へ」ノ號令ヲ下ス但此距離ハ検査準備ニ於テ得
タルモノナルヲ要ス

「觀へ」ニテ一番砲手ハ弧形照準機ヲ裝定シ高低照準ヲ爲ス検査官ハ十二

秒ノ終リニ「止メ」ノ號令ヲ下シ前法ニ準シ高低ノ誤差ヲ測リ連續五回施
行ノ後其平均誤差ヲ求ム

三番砲手ノ行フ方向照準

砲隊鏡ノ十字ヲ標板ノ縱軸ト合セシ

メ次ニ表尺ヲ移動シ觀線ヲシテ目標ニ一致セシメ架尾ヲ側方ヘ移動シ然
ル後「觀へ」ノ號令ヲ下ス

「觀へ」ニテ三番砲手ハ方向照準ヲ爲ス検査官ハ五秒ノ終リニ「止メ」ノ號
令ヲ下シ前法ニ準シ方向ノ誤差ヲ測リ連續五回施行ノ後其平均誤差ヲ求
ム

第八十五

平均誤差ノ計算ハ高低(方向)ノ誤差ヲ加へ其和ヲ照準回

數ニテ除ス

第八十六

平均誤差ノ數ニ應シ第一表ニ示ス點數ヲ與フ

褒賞

照準手拔擢法

照準手拔擢法

四十

第八十七 毎年撰拔検査終レハ中隊長ハ其優等者ヲ褒賞スル爲メ中隊ヲ整列シ優等者ニ徽章ヲ與フ

徽章ハ標準手列序表ノ順序ニ從ヒ各科十七點以上ノ成績ヲ得タル者五名ニ之ヲ與フ

第八十八 徽章ハ上衣ノ左肋ニ佩ハシム若シ二個以上ヲ有スルトキハ右ヨリ左ニ列ス

第八十九 徽章ハ全兵役間之ヲ佩用セシム

第三部 射撃

第一章 射法

總則

第九十 射法ハ野砲及山砲ノ精度ニ基キ戰團間屢遭遇ス可キ場合ニ應スル射撃修正一般ノ法則ヲ規定ス

第九十一 修正確實ニシテ迅速ナルハ射撃術ノ要訣ナリ故ニ何レノ場合ニ在リテモ教範ノ精神ニ基キ準據ス可キ各現象ヲ充分ニ利用シ時機ヲ失セス効力ヲ發揚スルヲ要ス之カ爲メ射法ニ通曉スルハ極メテ緊要ナル可カラス

第九十二 射法ハ中隊ノ爲メニ規定スト雖トモ射撃ノ威力ハ中隊ノ數増加スルニ從ヒ益顯著ナリ故ニ大隊以上ノ諸指揮官ハ各中隊及各大隊ノ連繫ヲ保チ野戰砲兵操典第二部ノ要領ニ從ヒ其射撃ヲ有利ニ指導セサル可カラス

射彈ノ觀測

射法

四十一

第九十三 彈着點及破裂點ノ目標ニ關スル遠近及高低ヲ正當ニ觀測スルハ射擊修正ノ基礎ナリ故ニ觀測確實ヲササル射彈ハ決シテ射擊修正ノ資ト爲スコトヲ得

第九十四 中隊長ハ常ニ觀測ノ爲メ最モ有利ナル位置ヲ占ムルコト緊要ナリ然レトモ此際中隊ノ射擊ヲ確實ニ指揮スルコトニ顧慮ス可キモノトス

第九十五 視力ニ適スル精良ノ眼鏡ハ著シク觀測ヲ容易ナラシム然レトモ若シ間接射擊ニ於テ最初ノ射彈方向疑ハシキ虞アルトキ或ハ目標近キトキハ眼鏡ヲ用ヒスシテ觀測スルヲ利トスルコトアリ

第九十六 着發射擊ニ於テ射彈目標ト觀測者トノ線内ニ彈着スルトキ爆烟目標ヲ蔽ヘハ其射彈ハ近ク目標爆烟ヲ蔽ヘハ遠ク又波狀地若クハ傾斜地ニ於テ爆烟目標ノ下方ニ現ハルレハ近ク上方ニ現ハルレハ遠シ爆

烟ヲ見ル能ハサルトキト雖トモ彈着ニ由リテ砂塵、破碎物等ヲ生スルトキハ之ヲ同一ノ徵候ニ供スルコトヲ得

命中彈ハ單ニ目標ニ及ホシタル効力ニ由リテ之ヲ知ルコトヲ得其他爆烟初メ目標ノ一方ニ現ハレタル後直ニ他ノ一方ニ現ハル、トキハ之ヲ命中彈ト見做スコトヲ得近距離ニ在リテハ此徵候無キモ目標ニ接近シタル彈着ヲ確實ニ觀測シタルトキモ亦之ニ準ス

一般ニ射彈ヲ觀測スルニハ爆烟ノ起レル瞬時ニ於テスルヲ要ス風射線ト平行ニ吹クトキ殊ニ然リ

第九十七 射彈若シ目標ト觀測者トノ線内ニ彈着セサルトキハ左ニ示ス如キ場合ニ在リテ目標ニ關スル彈着點ノ遠近ヲ判定スルコトヲ得風射線ト直角ニ吹クトキ爆烟目標ノ前方ヲ通過スレハ其射彈ハ近ク後方ヲ通過スレハ遠シ又風斜ニシテ放列ヨリ目標ノ方ニ吹クトキハ近着彈之

ニ反シ目標ヨリ放列ノ方ニ吹クトキハ遠着彈ノミチ知り得可シ但此等ノ場合ニ於テハ稍長ク觀測スルヲ必要トスルコトアリ

第九十八

其他尙放列ノ側方若クハ放列内ニ在ル補助觀測手ト中隊長トノ觀測ヲ以テ交會法ニ由リ目標ニ關スル射彈ノ遠近ヲ判定スルコト

ヲ得可シ之カ爲メ中隊長ハ補助觀測手ニ標線トシテ目標ノ全部若クハ一部ノ幅ヲ示ス補助觀測手ハ中隊長ニ面シ彈着點ヲ標線ノ右方ニ見レハ右手ヲ其側方ニ左方ニ見レハ左手ヲ其側方ニ伸ハシ方向中ニ見レハ兩手ヲ舉ケ方向擬ハシキトキハ帽ヲ振ル

中隊長補助觀測手共ニ同方向ニ見レハ射彈ハ疑ハシ

ニ觀測同シカラヌシテ補助觀測手目標ノ方ニ手ヲ伸ハセハ射彈ハ遠シ之ニ反スレハ近シ

補助觀測手兩手ヲ舉ケ中隊長補助觀測手ニ反スル方ニ見レハ射彈ハ遠シ

補助觀測手ノ方ニ見レハ近シ

又放列内ニ在ル小隊長ノ觀測ヲ交會法ニ由ル觀測ニ利用スルハ屢必要ナリ

第九十九

補助觀測手ノ位置ヨリ確實ニ目標ニ關スル彈着點ノ遠近

ヲ觀測シ得タルトキハ其遠近ヲ報スル爲メ中隊長ニ面シ片手ニ帽ヲ執リ遠着彈ナルトキハ之ヲ目標ノ方へ水平ニ伸ハシ近着彈ナルトキハ之ニ反ス

第一百

曳火射擊ニ於テハ破裂高ノ觀測ヲ爲スト同時ニ破裂點ノ目標ニ

關スル遠近ヲ知ルコト緊要ナリ爆烟目標ノ高サニ現ハル、如ク低ク破裂スルカ或ハ補助觀測手ヲ用ヒ交會法ニ由リテ觀測スルトキハ着發セル射彈ト同一ノ要領ニ從ヒ目標ニ關スル破裂點ノ遠近ヲ判定シ得可シ

爆烟目標ノ高サニ破裂セサル曳火榴霰彈ニ在リテモ其彈子ノ効力及其落

達ノ景況時トシテハ日光ノ爲メ地上ニ現ハル、爆烟投影ニ由リテ目標ニ關スル破裂高ノ遠近ヲ判定スルコトヲ得

目標後ニ於テ着發セル曳火榴霰彈ノ破裂點ハ通常目標後ニ在リ、推定スルコトヲ得然レトモ目標前ニ於テ着發シタルモノニ在リテハ目標ニ關スル其破裂點ノ位置ヲ推定スルコト能ハス

第一百 破裂距離ノ大小ハ側方位置ヨリ觀測スルカ或ハ彈子落達ノ景況ヲ明瞭ニ觀測シ得ルトキニ限り之ヲ判定スルコトヲ得

第二百 良好ナル破裂高ハ野砲三千米以下ニ在リテハ概千分ノ三其以上ニ在リテハ概千分ノ四ノ觀角ニ應スル高サニシテ之ヲ基高ト稱ス山砲ニ在リテハ野砲ノ二倍トス
基高ヨリ高ク破裂スルモノヲ高シ其二倍以上ノモノヲ甚々高シ又之ヨリ低キモノヲ低シト稱ス

六射彈中二發以上甚々高キカ或ハ五發以上高キトキハ其平均破裂高ハ過高ナリトス又六射彈中二發以上着發スルカ或ハ五發以上低キトキハ其平均破裂高ハ過低ナリトス其他ノ場合ニ在リテハ平均破裂高ハ良好ナリトス

破裂高ハ目標露面ナルトキハ其脚ヨリ遮蔽スルトキハ遮蔽稜頂ヨリ算ス

第二百三 地面ニ近ク破裂スル曳火ト着發トハ爆烟ノ色ト其形狀トニ由リ屢之ヲ區別スルコトヲ得即チ爆烟ノ色白クシテ形圓キトキハ概ネ曳火セルモノニシテ其色濁リヲ帶ヒ形不規ナルモノハ概ネ着發セルモノト判定シ得可シ

第二百四 目標ハ後方急峻ナル登傾斜ヲ爲ストキハ目標上ノ着發ト見做スコトヲ得ス又一般ニ目標下ノ曳火ハ着發ト見做スコトヲ得

第二百五 略良好ナル平均破裂高ヲ有スル數多ノ曳火榴霰彈目標ノ前

方ニ於テ曳火スルニ方リ稀ニ後方ニ於テ曳火スルカ或ハ數多射彈ノ彈子
目標ノ前後ニ跨リテ落達スルカ或ハ効力ヲ現ハスコトヲ確實ニ觀測スル
カ或ハ破裂距離ノ測知ニ由リテ其景況可ナルコトヲ知ルトキハ平均破裂
點ノ位置良好ナルモノトス之ニ反シ若シ六射彈中二個以上ノ比ヲ以テ目
標後ニ於テ曳火スルカ或ハ數多射彈ノ彈子ノ全部目標後ニ落達スルトキ
ハ其平均破裂點ハ過遠ニシテ不良ナルモノトス又側方ヨリノ觀測若クハ
彈子落達ノ景況ニ由リ破裂距離過大ナルヲ認ムルトキハ其平均破裂點ハ
過近ニシテ不良ナルモノトス其他觀測容易ナルニ方リ毫モ効力ヲ認メサ
ルトキハ其平均破裂點ノ位置不良ナルモノトス

第百六 觀測ヲ確實ナラシムル爲メ中隊長其觀測ノ結果ヲ直ニ發唱
ス可シ

射撃ノ開始及施行

第百七 中隊長ハ射撃開始ニ先タチ目標ニ至ル距離ハ幾何ナルヤ如
何ナル照準具及照準法ヲ撰用ス可キヤ豫メ構表尺ノ修正ヲ要スルヤ何レ
ノ點ニ對シテ試射ヲ行フ可キヤ如何ナル射法ヲ撰用ス可キヤ中隊ヲシテ
目標及照準點ヲ迅速且正確ニ理解セシメンカ爲メ如何ナル處置ヲ施ス可
キヤ已カ占ム可キ位置ハ何所ヲ最モ適當トスルヤ補助觀測手ノ使用ヲ要
スルヤヲ決定セサル可カラズ

第百八 目標ヲ精密ニ偵知スルハ試射ヲ正確且迅速ナラシムル爲メ
甚タ緊要ナリ故ニ射撃開始ニ先タチ中隊長ハ成ル可ク目標ノ種類大小及
其近傍ノ地形ヲ審査シ天然者クハ人工ノ遮蔽物或ハ凹窪地等ノ存否及其
目標ニ關スル位置ヲ探知シ目測ニ由ルノ外爲シ得レハ地圖或ハ測遠器ヲ

以テ距離ヲ測定シ或ハ他ノ射撃ニ由リ得タル照準ヲ利用シ要スレハ此際尙假標ノ撰定ヲモ爲ス可シ

射撃ノ開始ニ先タチ前項ノ諸件ヲ充分明白ニスルコト能ハサルトキハ射撃間尙目標ノ偵察ヲ繼續ス可シ

第百九

凹窪地、森林、籬笆及村落等ニ遮蔽シアル目標ニシテ我陣地ヨリ之ヲ望見シ得サルモ其位置ヲ概知セルトキハ射撃修正ノ基準ヲ得ンカ爲メ先ツ其稜線、林縁、籬笆及村端等ニ向テ試射セサルヲ得サルコトアリ

第百十

射撃ハ通常目測距離ヲ以テ開始ス然レトモ友軍ニ危害ヲ加フル虞アルカ或ハ遠彈目標ノ認識ヲ容易ナラシムルトキハ目測距離ヨリ大ナルヲ良シトス

距離目測ノ正確ハ著シク試射ヲシテ迅速容易ナラシム殊ニ近距離ニ在リ

テハ其良否直ニ勝敗ノ決ヲ爲スコトアリ

第百十一

目標ノ指示當ヲ得サルトキハ過誤ヲ來シ時間ヲ徒費ス故ニ目標指示ハ精確ニシテ且簡明ナルヲ要ス

目標明瞭ナルトキハ中隊長ハ高聲ヲ以テ一般ニ之ヲ示ス可シ而シテ單一ニ目標ヲ指示スルコト能ハサルトキハ通常地物ノ媒介ニ由ルヲ良シトス又發見シ難キカ或ハ複雑ナル説明ヲ要スル目標ニ對シテハ一名ノ將校若クハ下士ヲシテ各砲車ニ就キ方向ヲ與ヘシム若シ此將校下士未タ目標ヲ理解シアラサルトキハ中隊長ハ自カラ便宜ノ一砲車ニ方向ヲ與ヘ或ハ標杭ヲ植立シテ之ヲ示スヲ良シトス

敵ニ發覺セラル、コト無ク且敵火ノ虞無キトキハ小隊長要スレハ砲車長照準手ヲモ集メテ目標指示スルコトヲ得

詳細ニ目標ヲ指示スル場合ニ在リテハ先ツ其目標ノ種類及概略ノ方向ヲ

中隊一般ニ示スヲ要ス

目標ノ指示ヲ迅速且確實ナラシムル爲メ時機之ヲ許ストキハ略圖又ハ寫景圖ヲ調製スルヲ利アリトス此圖ニハ我陣地、觀測所、敵ノ占領セル地點又ハ敵ノ現出ス可シト豫想スル高地村落及著明ナル物體等ニ名稱或ハ一連ノ番號ヲ附シ且射距離、射界等射擊ニ必要ナル諸件ヲ記載ス

此圖ヲ調製スルニハ最初先ツ極メテ必要ナル地物ノミヲ單簡ニ記載シ我砲兵陣地確定スルニ至レハ之ヲ記入シ時間ヲ得ルニ從ヒ漸次之ヲ完成スルコトヲ勉メ終ニハ射擊ニ關スル要件ヲ全ク具備スルニ至ラシム

第一百十二 中隊長ハ一般ニ射距離、破裂高及破裂距離ノ修正ニ任シ方向ノ修正ハ中隊一齊ニ之ヲ行フノ他ハ通常之ヲ小隊長ニ任ス故ニ小隊長ハ射彈ノ方向及効力ヲ觀察スルヲ要ス之カ爲メ其小隊附近ニ於テ觀測ニ適當ナル位置ヲ取ル可シ若シ射彈ヲ觀測スルノ方法無キトキハ豫メ之

ヲ中隊長ニ報告ス然ルトキハ中隊長ハ己ノ觀測ニ由リ加フ可キ修正量若クハ躲避ノ量ヲ其小隊長ニ示ス可シ

方向ノ修正ハ觀測シタル方向躲避ノ量ニ應シ適當ニ橫表尺若クハ方向板分畫數ヲ増減セシム風側方ヨリ吹クカ或ハ砲耳軸傾斜セルトキハ成ル可ク發射前之ニ應スル修正ヲ行フ可シ總テ方向ノ修正ハ其躲避ノ量ヲ正シク測知セサルトキハ寧ロ強キヲ良シトス

第一百十三 照準及觀測ヲ容易ナラシメンカ爲メ通常目標ノ中央ニ近キ一點ニ對シ試射スルヲ良シトス然レトモ他ノ一部特ニ照準及觀測ニ利益アリト考定スレハ此點ニ對シテ試射ス若シ二個以上ノ中隊同一目標ニ對スルトキハ射彈ノ混淆ヲ避クル爲メ力メテ離隔スル點ニ對シテ試射スルヲ要ス

全中隊方向板ヲ以テ射擊スルトキハ目標ノ全部ニ對シテ試射ス

第一百十四 不齊地ニ於テ弧形照準機ヲ用ヒ射撃スルトキ中隊内各砲車ノ位置或ハ目標各部ニ著シキ高低アルトキハ射撃修正ノ際之ヲ顧慮ス可シ要スレハ中隊ノ一部ニ特別ノ修正ヲ命スルコトヲ得

第一百十五 目標分火ニ充分ナル正面幅ヲ有シ且人馬ニ對スル効力ヲ旨トスルトキハ試射ヲ終リタル後直ニ分火スルヲ常トス近距離以外ニ在リテモ正面大ニシテ略我放列線ト平行シ且明瞭ニ望見スルヲ得可キ目標ニ對シテハ最初ヨリ分火スルヲ利トスルコトアリ

分火ヲ行フニハ目標ノ全部ニ火力ノ平等ニ及フヲ旨トシ通常各砲車ヲシテ相對スル目標ノ部分ヲ射撃セシム可シト雖トモ時トシテハ其射線ヲ交又シテ之ヲ行フヲ必要トスルコトアリ

若シ目標砲兵ナルトキハ其砲數我ヨリ多キカ或ハ少キカニ從ヒ我火力ノ全部或ハ大部ヲ目標ノ中央部ニ向クルヲ良シトス

材料ニ對スル効力ヲ旨トスルトキハ試射ヲ終リタル後明瞭ニ望見シ得ルモノヲ撰ミ之ニ向テ分火スルヲ利アリトス

第一百十六 甚ダシク廣キ正面ヲ有スル目標ニ對シテハ區畫ヲ定メテ順次ニ射撃スルヲ常トス但シ其目標近距離ニ在リテ甚ダ危險ナルトキハ即時ニ目標ノ全部ニ對シ分火ヲ行ヒ且每發照準ノ方向ヲ變換シテ毫モ射彈ヲ被フサル部分無カラシムルヲ要ス

第一百十七 若シ目標ノ全部ヲ容易ニ望見シ得サルカ或ハ之ヲ簡單ニ指示スルコト困難ニシテ射撃開始前之ヲ部下ニ示スコト能ハサルトキハ中隊長ハ射撃中ニ生スル各現象ヲ利用シ目標ノ幅員端末等ヲ中隊ニ明示シ以テ有利ニ分火セシムルコトヲ勉ム可シ

第一百十八 試射中並ニ破裂高破裂距離ノ修正中ニ於ケル發射速度ハ各射彈ノ觀測及必要ノ修正ヲ爲シ得ルノ時間アルヲ以テ標準トス而シテ

射法

五十六

中隊長ノ迅速ナル決斷、機宜ニ適スル號令及小隊長以下ノ機敏ナル處置動作ニ依リテ試射ヲ成ル可ク速ニ結了スルヲ要ス

不動目標ニ對スル射擊

第一百十九

射擊ノ修正ハ之ヲ連續スル試射齊射ノ二期限ニ分ツ

第一期

試射ハ略近表尺ヲ得ルヲ目的トス之ニ由リテ得タル表尺ヲ試表尺ト稱ス

第二期

齊射ハ試表尺及破裂點ノ位置ヲ修正スルヲ目的トス

着發射擊

試射

第二百二十

試射ハ通常翼次射擊ニ由リ中隊ヲ以テ行フ要スレハ小隊

若シクハ一砲車ヲ以テ行フコトヲ得

第二百二十一

目標ヲ遠近兩彈ノ間ニ夾又ス之カ爲メ目標距離ノ大小

ニ應シ四百米若クハ二百米ノ濶度ヲ以テ逐次距離ヲ増減シ遂ニ最初ノ射彈ト反對方位ノ一射彈ヲ得ルニ至ル

斯ノ如クシテ得タル夾又ヲ逐次ニ半減シテ遂ニ五十米ニ短縮シ其中數ニ距離ヲ定ム之ヲ試表尺トス

命中彈ヲ確實ニ觀測シタルトキハ其距離ヲ以テ試表尺ト爲ス

六千米以上ノ距離ニ在リテハ夾又ヲ百米ニ止ムルヲ異ナリトス

第二百二十二

夾又ヲ探求中全ク觀測シ得サル射彈アルトキハ遅クモ

三發ノ後他ノ距離ニ移ル

又疑彈ヲ生スルノ虞多キトキハ一射彈ノ觀測ニ先タチ同景況ニテ尙一二發發射スルヲ有利トス

射法

五十七

第二百二十三 各射彈ノ爆烟ヲ天候其他ノ原因ニ由リ充分ニ認ムル能ハサルトキ及他中隊ノ射彈ト混淆スルノ虞アルトキハ分火セサル齊發ヲ行フチ有利トシ若シ地形錯雜ナルカ爲メ觀測シ能ハサル射彈多キトキ及發見困難ナル目標ノ認識ヲ容易ナラシメント欲スルトキハ分火セルモノヲ有利トス

齊射

第二百二十四 齊射ハ試表尺ヲ以テ射撃ヲ續行ス修正ハ通常觀測シタル六射彈毎ニ之ヲ行フ

第二百二十五 目標ニ對シ六射彈中二乃至四發近キトキハ修正完シトス六射彈中確實ニ二個ノ命中彈ヲ觀測シタルトキモ亦同シ
諸種ノ射彈ヲ得ルチ其比例所望ニ達セサルカ或ハ最初ノ三射彈悉ク同方

位ナルトキハ射距離五十米ノ修正ヲ爲ス此修正過大ニシテ尙所望ニ達セサルカ或ハ最初ノ三射彈悉ク同方位ナルトキハ更ニ反對方位へ二十五米ノ修正ヲ爲ス

前項ニ反シ五十米ノ修正尙過小ニシテ所望ニ達セサルカ或ハ最初ノ三射彈悉ク同方位ナルトキハ更ニ五十米ノ修正ヲ爲スカ或ハ夾又ヲ探求ス
一齊射ノ射彈所望ノ比例ニ達スルカ或ハ二十五米ノ修正ヲ行ヒタル後更ニ距離ノ修正ヲ行フニハ數多射彈觀測ノ結果ニ從フ六千米以上ノ距離ニ在リテハ前項ノ修正量ヲ二倍ス

第二百二十六 若シ觀測困難ニシテ夾又ヲ所望ノ濶度ニマテ短縮シ能ハサルトキハ得タル夾又ノ近極限ヲ起點トシ中隊一順毎ニ五十米ツ、距離ヲ増減シ以テ夾又内疑ハシキ地境ヲ反覆射撃シ爲シ得レハ夾又ヲ短縮ス全ク遠着彈ヲ觀測シ得サルトキモ亦之ニ準ス

深長ナル地境ニ普ク効力ヲ及ホサントスル場合ニ於テモ亦前項ノ要領ニ準ス

第二百二十七 數彈同時ノ彈着ニ由リ抵抗力アル物體ノ破壞顛覆ヲ容易ナラシメント欲スルトキハ齊發ヲ行フヲ有利トス

曳火射撃

試射

第二百二十八 第二百二十乃至第二百二十三ニ準シ通常着發榴霰彈ヲ以テ

試射ヲ行ヒ百米夾又ヲ得レハ其兩極限ヲ以テ試表尺ト定ム

試射中確實ニ命中彈ヲ觀測シタルトキハ其距離ヲ以テ百米夾又ノ近極限トス

第二百二十九 試表尺ヲ得タル後尙裝填シアル着發榴霰彈悉ク目標後

ニ彈着スルトキハ曳火榴霰彈ノ發射ヲ俟タスシテ射距離百米ヲ減ス但觀測セル射彈三發ニ滿タサルトキハ修正スルコト無シ

百米ヲ減シタル距離ニ於テ尙同景況ナルトキハ更ニ夾又ヲ探求ス

第二百三十 土地ノ高度、天候、季節其他ノ原因ニ由リ若シ射距離ト信管距離トノ一致セサルコトヲ豫知スルトキハ曳火榴霰彈ヲ裝填スルニ方

リ最初ヨリ所要ノ信管距離ヲ修正スルヲ要ス
弧形照準機ヲ用ヒテ射撃ヲ行フトキ土地ノ高低角著シケレハ亦前項ニ準シテ修正ス但豫メ弧形照準機ニ高低角ノ修正ヲ爲シタルトキハ之ヲ行フコト無シ

齊射

第二百三十一 既ニ試表尺ヲ得レハ先ツ其近極限ニテ曳火榴霰彈ヲ裝

填シ百米夾又ノ兩極限ヲ中隊ニテ一順若クハ數順交互ニ射撃ス之カ爲メ
通常一順裝填ヲ用フ

第三百二十一 破裂高及破裂距離良否ノ決定ハ通常觀測シタル六射彈
ノ結果ニ基ク

第三百二十三 六射彈中最初ノ二射彈連續甚タ高キカ或ハ着發スルカ
ニ從ヒ直ニ射距離五十米ヲ減シ或ハ増シテ一發發射ス此一發尙同景況ヲ
生スルトキハ更ニ射距離五十米ヲ減シ或ハ増ス修正可ナリト認ムルニ至
ルマテ斯ノ如クス然ルトキハ次回ノ一順裝填ニハ其得タル修正量ノ和ヲ
信管距離ニ修正ス但此際試表尺ヲ變スルコト無シ
其他ノ場合ニ在リテハ平均破裂高過高ナルカ過低ナルカニ從ヒ次ノ一順
裝填ニハ信管距離二十五米ヲ修正シ途ニ良好ナル平均破裂高ヲ得ルニ至
ル既ニ一タヒ良好ナル平均破裂高ヲ得レハ爾後ノ修正ハ數多射彈觀測ノ

結果ニ從フ二十五米ノ修正後次ノ一順裝填ニ於テ其修正過大ナル結果ヲ
現ハシタルトキモ亦然リ

第三百二十四 平均破裂高略良好ナルハ破裂距離ノ修正ハ左ノ法ニ從フ
兩極限中一極限ニ於ケル平均破裂點ノ位置良好ナルトキハ其極限ニ於テ
連續裝填ス

近極限ニ於ケル平均破裂點ノ位置過近ニシテ遠極限ニ於ケルモノ過遠ナ
ルトキハ其中數ニ於テ連續裝填ス

近極限ニ於ケル平均破裂點ノ位置過近ナルトキハ之ヲ放棄シ遠極限ヲ射
撃ス爾後連續裝填ヲ爲ス可キ標準ヲ得サルトキハ此極限及之ヨリ百米増
シタル距離ヲ交互ニ射撃ス

遠極限ニ於ケル平均破裂點ノ位置過遠ナルトキハ之ヲ放棄シ近極限ヲ射
撃ス爾後連續裝填ヲ爲ス可キ標準ヲ得サルトキハ此極限及之ヨリ百米減

シタル距離ヲ交互ニ射撃ス
 遠極限ニ於ケル平均破裂點ノ位置過近ナルトキハ兩極限ヲ放棄シ遠極限
 ヨリ更ニ百米遠キ距離ヲ射撃ス爾後連續裝填ヲ爲ス可キ標準ヲ得サルト
 キハ此距離及之ヨリ百米増シタル距離ヲ交互ニ射撃ス
 近極限ニ於ケル平均破裂點ノ位置過遠ナルトキハ兩極限ヲ放棄シ近極限
 ヨリ更ニ百米近キ距離ヲ射撃ス爾後連續裝填ヲ爲ス可キ標準ヲ得サルト
 キハ此距離及之ヨリ百米減シタル距離ヲ交互ニ射撃ス
 平均破裂點ノ位置ニ關シ確實ナル標準ヲ得サルトキハ百米夾又ノ兩極限
 ヲ交互ニ射撃ス
 破裂點位置ノ判定困難ナルニ方リ要スレハ一時射距離ヲ減少シ破裂高ヲ
 低下シテ觀測スルコトヲ得
 某距離ニ於テ射撃中六發ノ發射ヲ俟タスシテ其距離ヲ放棄ス可キ標準ヲ

得タルトキハ直ニ他ノ距離ニ移ルコトヲ得
 連續裝填後ノ修正ハ數多射彈觀測ノ結果ニ從フ其修正量ハ通常五十米ト
 ス

第三百三十五

試射中觀測困難ニシテ夾又ヲ所望ノ潤度ニマテ短縮シ
 能ハサルトキハ其近極限ヲ起點トシテ曳火榴霰彈ヲ裝填シ百米ツ、距離
 ヲ増減シ疑ハシキ地境ヲ一順裝填ヲ以テ反覆射撃シ某距離ニ於テ破裂距
 離良好ナルヲ認ムレハ此距離ニ於テ連續裝填ス
 深長ナル地境ニ普ク効力ヲ及ボサントスル場合ニ於テモ亦前項ノ要領ニ
 準ス

第三百三十六

稍長時間ニ亘リ毫モ効力ヲ認メ得サルトキ若干ハ目標
 ノ轉位ニ顧慮スルトキ要スレハ若干砲車ニ着發榴霰彈ヲ裝填セシム

第三百三十七

中隊ノ砲數六門ニ滿タサルトキハ一順裝填ヲ用フルコ

下無ク第三百三十三及第三百三十四ノ要領ニ準シ破裂高破裂距離ヲ修正ス

動目標ニ射スル射撃

第三百三十八 動目標ニ對シ試射スルニハ概ネ第二百二十乃至第二百二十

三ノ要領ニ準ス

第三百三十九 既ニ所望ノ夾又ヲ得ルヤ通常曳火榴霰彈ヲ以テ射撃ス

ルヲ最良トス然レトモ目標甚々不規ノ運動ヲ爲ストキハ着發榴霰彈ヲ以テ射撃スルヲ有利トス

曳火射撃ヲ行フニハ通常一順裝填ヲ用フルコト無シ

第三百四十 目標ノ必ス通過セサル可カラサル確定ノ點アレハ豫メ此

點ニ射撃ヲ修正シ其通過ニ方リ曳火榴霰彈ノ急射ヲ行フヲ利アリトス

第三百四十一 破裂高ノ修正ハ概ネ第三百三十三ノ要領ニ準スト雖モ要

スレハ一時射距離ヲ増減シテ之ヲ修正スルコトヲ得

第三百四十二 或ハ運動シ或ハ停止スル目標ニ對シテハ不動目標及動

目標ニ對スル射法ヲ適當ニ應用スルヲ要ス

第三百四十三 目標ノ駐止、歩度ノ變換或ハ行進方向ノ誤認等ニ疑ヲ

生シタルトキ要スレハ着發榴霰彈ヲ以テ更ニ夾又ヲ探求ス可シ

前進目標

第三百四十四 目標ノ速度一分時間ニ約ネ百乃至百五十米ナルトキハ

二百米ノ間ニ目標ヲ夾又シ其近極限ニ表尺ヲ定メ以テ指命發射ヲ行ヒ目標ノ彈着點ニ近接スルニ從ヒ發射ノ速度ヲ増加シ途ニ急射ヲ行ヒ目標効力界ヲ脱スルヲ認ムレハ指命發射ニ移ルト同時ニ更ニ之ヨリ二百米ヲ減シ前ノ加ク射撃ス

若シ二百米夾叉ヲ得ルニ方リ近着彈ヲ遠着彈ニ先タテ得タルトキハ其近極限ニテ復射スルヲ要ス若シ此射彈齟齬スレハ直ニ其射距離ヲ二百米減シ前項ノ如ク射擊ス但齟齬彈ヲ觀測ハルマテニ若干ノ疑彈ヲ生スルカ或ハ其他ノ原因ニ由リ若干ノ時間經過シタルトキハ尙二百米夾叉ノ探求ヲ繼續ス可シ

第四百四十五

曳火射擊ヲ行フニハ前條ノ要領ニ準シ目標ヲ二百米ノ間ニ夾叉シ直ニ其近極限ニ於テ要スレハ其極限ヨリ百米ヲ減シテ曳火榴霰彈ヲ裝填セシメ以テ指令發射ヲ行ヒ目標効力界ニ近接スルニ從ヒ發射ノ速度ヲ増加シ遂ニ急射ヲ行フ目標効力界ヲ脫スルヲ認ムレハ指令發射ニ移ルト同時ニ更ニ二百米ヲ減シ前ノ如ク射擊ヲ要スレハ若干砲車ニ着發榴霰彈ヲ裝填セシム

第四百四十六

目標ノ速度一分時間ニ約二百乃至二百五十米ナルトキ

ハ夾叉及距離遞減ノ潤度ヲ三百米トシ前法ニ準フ要スレハ試射ニ方リ最初ノ夾叉潤度ヲ六百米トシ之ヲ半減スルコトヲ得

第四百四十七

目標ノ速度一分時間ニ約三百米以上ナルトキハ必ス近着彈ヲ得可キ表尺ヲ取り成ル可ク最初ヨリ曳火榴霰彈ヲ裝填シ指令發射ヲ行ヒ目標効力界ニ近接スルニ從ヒ發射ノ速度ヲ増加シ遂ニ急射ヲ行フ目標効力界ヲ脫スルヲ見レハ適當ニ距離ヲ減シ再ビ前ノ如ク射擊ス

退行目標

第四百四十八

退行目標ニ對シテハ前進目標ニ於ケルト同一ノ要領ニ準シ反對ノ方法ヲ以テ射擊ス但距離ノ變更ニ先タテ要スレハ裝填シアル射彈ヲ打拂ハシム

橫行目標

第四百十九

不動目標ニ對スル射撃ノ法則ヲ斟酌應用ス可シ
照進點ハ通常目標ノ先頭トス若シ照準點ニ對シテ彈着セシメント欲セハ
目標一分時間ニ約百米或ハ二百米ノ速度ニテ運動スルニ從ヒ照門ヲ目標
ノ行進方向ヘ野砲ニ在リテハ七個或ハ十四個山砲ニ在リテハ五個或ハ十
個轉移スルヲ要ス速度約三百米以上ナルトキハ之ニ準シテ照門ヲ轉移シ
要スレハ目標ノ前方ヲ照準セシム

斜行目標

第五百十

目標ノ前進(退行)速度ト橫行速度トヲ斟酌シ前ニ示シタ
ル諸法則ヲ應用シテ射撃ス

近距離ノ目標ニ對スル射撃

第五百十一

以下記スル射法ハ近距離ニ在ル不動目標ニ對シ之ヲ用
フ但歩兵ニ對シテハ其運動間ニ在リテモ此射法ヲ用フルコトヲ得防禦工
事其他ノ建築物等ニ對シテハ第二百二十乃至第二百二十七ノ要領ニ準ス可キ
モノトス

第五百十二

近距離ニ於ケル軍隊ニ對シテハ短時間ノ奏効ヲ最大要
件トス之カ爲メ殊ニ神速ナル決斷、正確ナル距離目測、至嚴ナル射撃軍
紀及大ナル發射速度ヲ緊要トス

第五百十三

彈種ハ曳火榴霰彈ヲ以テ最良トス

第五百十四

曳火射撃ヲ行フニハ第二百二十八及第二百二十九ノ要領ニ
準シ着發榴霰彈ヲ以テ試射ヲ行ヒ二百米夾又ヲ得レハ直ニ其中數ニ距離
ヲ定メ之ヲ試表尺トシ曳火榴霰彈ヲ裝填ス試射終レハ通常直ニ急射ヲ行
ワ此場合ニ在リテハ一順裝填ヲ行フコト無シ

第一百五十五 破裂高ノ修正ハ概ネ第三百三十三ノ要領ニ準シ信管距離ノミチ以テ行フ但二十五米ノ修正ヲ行フコト無シ又破裂距離ノ修正ハ概ネ第三百五ノ要領ニ準シ其良否ヲ判定シ所要ニ應シ五十乃至二百米ノ修正ヲ行フ

第一百五十六 試表尺ヲ得タル後裝填シアル着發榴霰彈ニシテ最初ノ射彈三發以上目標後ニ彈着スルトキハ曳火榴霰彈ノ發射ヲ俟タス觀測ノ結果ニ基キ通常百米ノ修正ヲ行フ可シ

第一百五十七 目標距離ニ關シ確實ナル標準アルトキハ目測距離ト雖トモ最初ヨリ曳火榴霰彈ヲ以テ射擊スルコトヲ得

第一百五十八 着發射擊ヲ行フトキハ第二百二十乃至第二百二十六ノ要領ニ準シ試表尺ヲ得ルヤ通常直ニ急射ヲ行フ

第一百五十九 三百米以内ノ目標ニ對シテハ零距离ノ曳火榴霰彈ヲ裝

填シ急射ヲ行フ

防楯ニ對スル射擊

第一百六十 先ツ曳火榴霰彈ヲ以テ主トシテ敵ノ人馬ニ對シ射擊シ其効果ヲ認ムルニ至レハ榴彈若クハ着發榴霰彈ヲ以テ掩護充分ナル人員材料ヲ損傷破壞スルヲ可トス時トシテ中隊ノ一部ヲ以テ榴彈或ハ着發榴霰彈ヲ其他ヲ以テ曳火榴霰彈ヲ發射スルヲ利トスルコトアリ

曳火榴霰彈ノ射擊ニ在リテハ時トシテ夾叉ヲ短縮スル低破裂ヲ用ヒ射擊スルヲ利トスルコトアリ

氣球射擊

第一百六十一 砲車逐次ノ裝填ニ由ル曳火榴霰彈ノ破裂點ヲ以テ逐次射法

半減法ニ由リ二百米夾又ヲ求メ其兩極限並ニ其中數ヨリ各五十米ヲ減シタル距離ヲ以テ試表尺トナス

試表尺ヲ得ルヤ通常其三極限ヲ以テ急射若クハ齊發ヲ行フ破裂高及破裂距離ノ修正ハ第三百三十三及第三百三十四ノ要領ニ準ス但破裂高ヲ修正スルニハ射距離ヲ以テスルヲ異ナリトス

破裂點觀測ノ爲メニハ補助觀測手ヲ併用シ第九十八ニ準シテ其遠近ヲ判定ス補助觀測手兩手ヲ舉ケ中隊長標線ノ方向ニ見タル射彈ハ疑ハシト雖トモ目標ニ接近セルモノト判定シ其距離ト之ヨリ百米増減シタルモノトヲ試表尺トナス

補助觀測手ニハ標線トシテ目標ノ全幅ヲ示シ成ル可ク遠ク放列ノ兩側ニ出スヲ利アリトス

夜間射擊

第百六十二

夜間射擊ハ晝間ノ射擊ヲ繼續スルカ晝間ニ於テ諸準備

ヲ整ヘアルカ若クハ夜間火光ヲ認識シ得タルトキ施行スルモノトス

既ニ試射ヲ完了シアルトキハ最モ利ナリ故ニ必要ナル地點ハ豫メ晝間ニ於テ試射シ分火ノ處置ヲ施シ置クヲ可トス若シ晝間試射ヲ爲シ能ハサルトキニ在リテハ各砲車ノ射線並ニ補助觀測手及中隊長用標線ノ標定或ハ精密ナル距離ノ測定等射擊ノ準備ハ總テ晝間ニ於テ整ヘ置クヲ要ス又夜間火光ヲ認メテ射擊スル場合ハ發射前最モ精確ニ上記ノ準備ヲ爲スコト必要ナリ

夜間ノ試射ハ前條ノ要領ニ準フ若シ射彈ノ觀測困難ナルトキハ確實ニ觀測シ得タル近彈ヲ起點トシテ第百二十六及第三百三十五ニ準シ疑ハシキ地

境ヲ射擊スルヲ可トス

夜間ノ射擊ニハ軍隊ニ對シテ曳火榴霰彈ヲ用ヒ村落森林或ハ堡壘等ニ對シテハ着發榴霰彈或ハ榴彈ヲ用フルヲ常トス

第二章 射擊演習

總則

第六十三 射擊演習ハカメテ戰鬪ノ要領ニ基キ實射ヲ行ヒ以テ之ニ熟練セシムルヲ目的トス

第六十四 演習ノ成果ヲ良好ナラシムルニハ充分ナル射擊演習ヲ行フニ在リ之カ爲メ中隊長以上ノ諸隊長ハ豫メ各種ノ方法ニ由リ實射ヲ行フニ最モ必要ナル諸件ヲ各別ニ或ハ併用シテ營内若クハ野外ニ於テ幹部又ハ部隊ヲ以テ豫習シ射擊教育ノ補助ニ供スルヲ要ス

第六十五

射擊演習ニ於テハ特ニ左ノ目的ニ注意スルヲ要ス

將校ノ射擊教育ニハ大中少尉ニ中隊ノ指揮及中少尉ニ小隊長ノ勤務ヲ教育シ大隊長及故參大尉ニ大隊ノ指揮ヲ演習セシム

下士ニハ射擊間砲車ノ位置ヲ適當ナラシメ且部下砲手ノ操作ヲ監視シ及命セラレタル修正ノ正當ナル實施ヲ監督スルニ熟セシムルヲ要ス又古參下士ニハ小隊長ノ職務ヲ執ラシム

兵卒ニハ實射ノ操作ニ習熟セシメ又適任ナル砲手ニハ砲車長ノ職務ヲ教育ス

第六十六

射擊演習ハ射擊場ニ於テ行フヲ常トス然レトモ生地ニ

於ケル射擊演習ハ演習ノ價值ヲ一層大ナラシム故ニ機會アラハ之ヲ行フヲ要ス

常ニ射擊セサル射擊場ニ於テスルトキハ生地射擊ニ等シク價值アルモノ

射擊演習

ナリ

第六十七 射撃演習ハ聯隊毎ニ之ヲ行フ若シニ聯隊以上同時ニ同射撃場ニ於テ演習スルトキハ高級故參團隊長射撃ノ時間及射撃場ノ區分ヲ定ム

第六十八 旅團長ハ部下各聯隊ノ射撃演習ヲ監督シ要スレハ之ヲ統監ス

第六十九

聯隊長ハ射撃演習ニ先タチ左ノ規定ヲ爲ス可シ

各大隊ノ行フ可キ射撃ノ日時及射撃場ノ配當

大隊射撃ニ於ケル統監及演習大隊長ノ指定

大隊ニ屬セサル將校ノ射撃ニ關スル件

各大隊ニ彈藥ノ配當

聯隊長ハ右ノ外大隊及中隊ノ射撃計畫ニ於テ注意ス可キ要件ヲ知ラシメ

大隊長ハ此規定ニ基キ更ニ部下中隊ニ射撃ハ日時、射撃場及彈藥ヲ配當シ且統監及演習中隊長ヲ指定ス

中隊長ハ大隊長ノ指示ニ基キ演習ノ計畫ヲ定メ大隊長ニ呈ス大隊長ハ之ヲ點檢シ聯隊長ノ認可ヲ經テ實施セシム大隊長ノ演習計畫モ亦之ニ準ス

第七十 演習ハ易ヨリ難ニ進ムノ原則ニ從ヒ平素教育セル諸動作ヲ漸次確實ニ施行シ得セシムル爲メ最初ヨリ困難ナル射撃ノ實施ヲ望ム可カラス

第七十一

演習ノ價值ハ其計畫指導ノ如何ニ在リテ存ス故ニ統監

ハ最モ慎重ノ注意ヲ加ヘ演習員ノ技術ニ應ジ演習地ノ地形ト所用彈藥ノ多寡等ヲ參酌シ綿密畫策セサル可カラス

統監ハ射撃問題ヲ與ヘ警戒上ノ顧慮ヲ要スルトキノ他ハ成ル可ク實行ノ方法ヲ制限セサルヲ要ス而シテ統監ハ始終射撃ヲ判斷センカ爲メ中隊長

射撃演習

ノ射撃指揮ノ經過ヲ熟知スルヲ要ス

第七十二

目標設置ノ適否ハ射撃演習ノ成果ニ影響ヲ及ボスコト著大ナリ而シテ其要領ハ戦闘ノ實況ニ適合セシムルニ在リ

過度ニ認識シ易キ目標ハ之ヲ設置ス可カラズ初歩ノ射撃ニ於テモ亦此ニ

注意スルヲ要ス又目標ハ實戰ニ於テ現ハル可キ距離ニ配置シテ射撃スル

ヲ法トス

第七十三

彈藥ハ各中隊及大隊ノ教育程度並ニ射撃問題ノ種類ヲ參酌シ適當ニ配當スルコトニ注意スルヲ要ス

第七十四

各種目標ニ對シ諸種ノ射撃ヲ行ハシムルコト必要ナリ然レトモ演習用彈藥ノ數ハ限リアルヲ以テ射撃中最モ必要ニシテ且最モ

困難ナル一部即チ試射及齊射ノ修正ヲ成ル可ク履行フヲ要ス

第七十五

中隊及大隊ハ一射撃演習ニ於テ射撃問題ヲ悉ク答解ス

ルコト能ハサル可シ故ニ數年ニ亘リテ研究スル如ク之ヲ配當スルヲ要ス
戦闘間最モ多ク對戰ス可キ主要ナル目標ニ對スル射撃ハ確實ヲ得ルニ至
ルマテ再三施行セサル可カラズ

第七十六

統監ハ中隊ニ每射撃ノ豫定彈藥數ヨリモ多クノ彈藥ヲ携行セシムルヲ要ス

統監ハ常ニ彈藥ヲ節用スルコトニ注意シ演習ノ目的ヲ達シタルトキハ直
ニ之ヲ停止シ其射撃ニ充テタル彈藥ノ殘餘ハ更ニ他ノ射撃ニ利用スルヲ
要ス

第七十七

中隊或ハ大隊ニ於テ施行スル射撃ハ力メテ之ヲ利用ス
ルヲ要ス故ニ該演習ニ與ラサル他ノ將校ヲシテ成ル可ク此演習ヲ見學セ
シム可シ

射撃ノ觀測ハ力メテ之ヲ獎勵ス可シ之カ爲メ各自每發ノ觀測ヲ筆記シ監

的表ニ對照セシムルヲ利アルトス下士ニモ亦觀測ヲ獎勵ス可シ
撰拔照準手ハ所屬中隊ノ射擊アル毎ニ悉皆演習ニ與ラシム可シ

第七十八

射擊ニ際シ中隊或ハ大隊ハ力メテ戰砲隊ヲ編成スルヲ
要ス

基本射擊

第七十九

基本射擊ノ目的ハ士官以下ヲシテ實射ニ於ケル諸動作
ヲ了解セシメ且射擊ノ法則ニ習熟セシメ中少尉ヲシテ中隊ノ射擊指揮ヲ
修得セシムルノ機會ヲ與フルニ在リ

基本射擊ハ戰團射擊ノ豫習タリ故ニ必要ヨリモ多ク施行セサルモノトス
第八十 基本射擊ニ在リテハ中隊長其演習ヲ計畫指導シ部下ノ諸

動作ヲシテ戰團射擊ニ支障無キニ至ラシムルヲ要ス之カ爲メ毎射擊日ニ

ハ成ル可ク充分ナル時間ヲ與ヘサル可カラズ中隊長ハ其計畫ニ基キ豫メ
部下ニ必要ナル教示ヲ與ヘ且成ル可ク之カ準備ノ演習ヲ行フ可シ

第八十一

基本射擊ニ在リテハ中少尉ヲ演習中隊長トス始メハ各
種ノ距離ニ於テ各種目標ニ對シ試射ヲ行ヒ爾後齊射ノ修正法ヲ施行ス但
近距離目標ニ對シテハ神速ナル發射速度ヲ用フルヲ要セス
陣地進入ハ總テ戰團的ニ行フヲ要ス

第八十二

中隊長ハ射擊間職務ノ實行ヲ充分ニ監査センカ爲メ所
要ノ將校或ハ下士ヲ補助ニ充ツルヲ良シトス
射擊間要スレハ射擊ヲ中止シテ教示ヲ與フ

射擊間ニ認メタル缺點ハ成ル可ク速ニ操砲教練及照準法ヲ實施シ之ヲ除
去スルコトヲ勉ム可シ

戰鬪射擊

第百八十三 戰鬪射擊ノ目的ハ將校以下ヲシテ已ニ學ビ得タル技能

ヲ戰鬪間發生ス可キ各時機ニ應用セシムルニ在リ

戰鬪射擊ハ射擊教育ノ主眼ナリ故ニ射擊日ノ多數ヲ此射擊ニ用フ可シ

第百八十四 演習ハ單簡ナル戰術上ノ想定ヲ基礎トシ力メテ實地ニ

適合スル如ク計畫スルヲ要ス

射擊ノ問題ハ演習開始ニ際シ始メテ之ヲ演習隊長ニ示シ咄嗟ノ間能ク其

問題ニ應シ適當ニ動作シ得ル如ク習熟セシムルコトヲ勉ム可シ

第百八十五 陣地撰定及放列布置ニ方リテハ力メテ控束ヲ加フルコ

ト無ク唯警戒上ノ顧慮ヲ要スルトキノミ制限ヲ與フルモノトス

第百八十六 人員材料ノ缺損、補充、修理及土工作業ヲ行ハシムル

トキハ實戰ニ於テ中隊ノ射擊動作ニ及ホス困難ヲ知ラシムルヲ得可シ
操砲ノ戰況ニ應スル發射速度ヲ充タシ得ルニ至ルヲ要ス

中隊戰鬪射擊

第百八十七 中隊ノ戰鬪射擊ニ習熟スルハ戰時ニ於テ功ヲ奏スルノ

基礎タリ故ニ此演習ニハ戰鬪射擊中成ル可ク充分ナル日時ト彈藥トヲ配

當スルヲ要ス

第百八十八 中隊戰鬪射擊ニ在リテハ大尉若クハ中尉ヲ演習中隊長

トシ大隊長若クハ大尉之ヲ統監ス

第百八十九 中隊戰鬪射擊ニ在リテハ主トシテ大隊内ニ於ケル中隊

ノ動作ヲ練習セシム可シト雖トモ孤立中隊ニ關スル演習モ亦忽諸ニ附ス
可カラス

演習射擊

演習射擊

八十六

第九十 射擊問題ハ教育ノ程度ニ應ジ戰況、目標ノ難易及地形ノ關係等ヲ參酌シ演習ヲシテ漸次困難ナル景況ノ度ニ進ムルヲ要ス
不意ニ現出スル目標、動目標若クハ近距離目標ニ對スル射擊及目標變換等ハ演習中隊長ノ果斷沈着ヲ練磨シ且射擊軍紀ヲ鞏固ニスルノ機會ヲ與フルモノトス

第九十一 若干中隊ニ多數ノ彈藥ヲ費ス可キ射擊ヲ行ハシメ以テ各種目標ニ對スル効力ヲ知ラシムルコトヲ得

大隊戰鬪射擊

第九十二 大隊戰鬪射擊ハ射擊指揮ニ關スル操典ノ原則ヲ應用シ各中隊ヲシテ互ニ連繫ヲ保チ集團ノ効ヲ現ハスコトヲ習熟セシムルニ在

第九十三 大隊戰鬪射擊ニ在リテハ聯隊長之ヲ統監ス若シ故參大尉ヲ演習大隊長トスルトキハ大隊長ヲシテ之ヲ統監セシムルコトヲ得

第九十四 統監ハ各種ノ場合ニ於ケル砲兵戰ノ實行、敵歩兵攻撃ニ對スル戰鬪、友軍歩兵攻撃ノ準備等ヲ射擊問題ト爲シ射擊間目標變換射擊ノ集中等ノ必要ヲ生セシメ以テ大隊長ニ目標配當ノ變更ヲ爲サシムル如クスルヲ要ス之カ爲メ近距離目標ヲ用ヒ且中隊長ノ獨斷ヲ以テ目標變換ヲ行フ場合ヲモ實行セシム可シ

第九十五 各中隊射擊ノ觀測ヲ容易ナラシメ或ハ各中隊ノ効力ヲ明知セント欲シ射擊問題ノ撰定ヲ控束ス可カラス多クノ場合ニ於テ監的哨ノ觀測ハ一般ノ射擊ヲ判斷シ得ルニ足ル又已ムヲ得サルトキハ單ニ効力ノミニヨリ判斷スルコトヲ得

目標ノ偵察、補助觀測手ノ使用、放列陣地ノ警戒等ヲ實施スルノ機會ハ

演習射擊

八十七

カメテ之ヲ與フ可シ

聯隊戰鬥射撃

第百九十六 充分ナル彈藥ヲ有シ機會之ヲ許セハ稀ニ聯隊戰鬥射撃ヲ行フコトヲ得其射撃指揮ハ戰術上ノ動作ヲ主眼トス

射撃ノ審査

第百九十七 射撃ノ審査ニ方リテハ一般ニ戰術動作ニ關スル事項及特ニ演習地ニ於テ示スヲ有利ナリト認ムルモノニ就キ射撃終ルヤ直ニ現地ニ於テ講評ヲ行フモノトス然レトモ射撃ノ成果ヲ審査シ之ニ就キテ講評ス可キモノハ更ニ便宜ノ場所ニ於テ之ヲ要ス

第百九十八 射撃ノ審査ニ方リ行フ可キ講評ハ射法ニ通曉セシメ射

撃ニ於テ生シタル疑問ノ見解ヲ明ニスルモノナリ

第百九十九 射撃ノ成果ヲ審査シタル後行フ可キ講評ハ演習後成ル

可ク速ニ之ヲ行ヒ以テ射撃間ニ得タル記憶ヲ喚起セシムルヲ良シトス且少クモ該演習ニ出場セシ將校ハ之ニ參列セシムルヲ要ス

統監ハ講評前ニ所要ノ將校下士ヲ指命シ射撃成果表ニ準シ講評ニ必要ナル事項ヲ塗板ニ謄寫セシメ或ハ印刷シテ分配セシメ然ル後講評ヲ行フヲ良シトス講評前ニ於テ要スレハ演習隊長ヲシテ其爲シタル動作ニ就キ説明ヲ爲サシム可シ

第二百 射撃ノ審査ニ關スル講評ハ綿密ニ教訓ノ意ヲ以テス可シ其諸責ヲ要スルトキニ在リテモ過激ニ渉ラサルヲ要ス又過度ニ長時間ヲ費ス可カラズ

演習上過誤アルトキハ其原因ヲ明ニシテ之ヲ矯正ス可シ又假令過誤ニ非

射撃演習

サルモ一層善良ナル方法アルトキハ之ヲ教示ス可シ

第二百一 基本射撃ニ在リテハ統監ハ各修正及號令ヲ操典教範ニ比較シ各觀測ヲ監的表ト對照スルヲ要ス

中隊戰團射撃ニ在リテハ特ニ射撃問題ノ答解セラレタルヤ否ヤ又最モ簡單ニ答解セラレタルヤ否ヤヲ示スヲ要ス而シテ効力ヲ主トス可シ効力ノ判斷ハ目標、時間及彈藥ノ數ニ關ス又何レノ時期ヨリ効力ヲ及ホシタルヤ分火ハ如何ナリシヤヲ討究スルヲ要ス射撃問題ノ答解サレサルトキハ其過誤ノ原因ヲ示シ其方法ヲ教示ス可シ

大隊戰團射撃ニ在リテハ特ニ大隊長ノ處置ニ重キヲ置ク可シ然レトモ各中隊ノ射撃モ亦忽諸ニ附ス可カラス

第二百二 下士ニハ中隊内ニ於テ其行ヒタル射撃ニ就テ適當ノ教示ヲ爲ス可シ

照準手ニハ射撃成果表ヲ用ヒテ講評シ照準ノ誤差ヨリ生スル射撃ノ結果ヲ明ニシ且從來射撃ニ關シテ教授セル事項ヲ各射撃ニ對照シテ之ヲ説明ス可シ

射撃成果表ノ調製

第二百三 射撃成果表ハ射撃ノ成績ヲ審定スルノ基礎ヲ作ルノ外尙兵器ノ統計的景況、射法ノ價值及効力ニ關スル事項ヲ鑑定スルノ用ヲ爲ス故ニ其記載法ハ確實ナルヲ要ス

射撃成果表ノ調製ニ要スル原表ノ方式ハ聯隊長適宜之ヲ定ム

第二百四 統監ハ講評終ルノ後原表ヲ演習隊長ニ交附ス該隊長ハ更ニ之ニ基キ射撃成果表ヲ完成ス

第二百五 中隊ニ於テ施行セシ射撃ノ成果表ハ各一葉宛毎年度之ヲ

一括シ中隊ニ於テ保存スルモノトス

第二百六

射撃成果表ニ記入ス可キ二三ノ方法ヲ示スコト左ノ如シ
他ハ附表射撃成果表ノ例ニ準ス

砲車番號 逐次ニ發射セル各砲車ノ番號ヲ記入ス

號令報告 中隊長、小隊長ノ號令、呼號及報告等ニシテ射撃ノ成果ヲ審

査スルニ必要ナル諸件ヲ極メテ簡略ニ記入シ其混同ヲ避クル爲メ適宜ノ

括弧ヲ附シ之ヲ區別ス

目標若クハ陣地ヲ變換シタルトキハ砲車番號欄ヨリ觀測ノ欄ニ通シ赤色

橫線試表尺ヲ得タルトキ及各齊射ニハ號令報告ノ欄ニ赤色橫線ヲ畫シ又

動目標ハ號令報告欄ノ右方ニシテ兩端ニ矢ヲ附シタル縱線急射齊發ハ其

左方ニシテ縱線ヲ赤色ニテ畫ス而シテ急射ハ觀測欄ニ於テ各其觀測ニ應

ジ赤線ヲ以テ區畫ス

發射番號 一翼或ハ中間ヨリ發射ヲ始ムルニ關セス其發射シタル順序ニ

從ヒテ番號ヲ記入ス但齊發及急射ニ在リテハ順次ニ關セス發射數ニ應ジ

番號ヲ附シテ記入ス而シテ彈種ヲ區別スル爲メ此番號欄ヲ榴霰彈ニ在リ

テハ藍線榴彈ニ在リテハ赤線ヲ以テ區畫ス

觀測 左ノ例ニ準シ觀測セル符號ヲ記入スルモノトス

中隊長ノ觀測

一 近シ

十 遠シ

土 命中

? 疑シ

?? 見エス

チ十着發遠シ

射撃演習

キ一基高近シ

ヒ十低シ遠シ

ハタ？ 基タ高シ疑シ

タソヨ 高シ東葉良シ

キソト 基高東葉遠シ

キノ一 基高東葉近シ

放列哨ノ観測

-8 左八米着發

-10/1 $\frac{3}{4}$ 左十米、一基高四分ノ二

+20/2 $\frac{1}{4}$ 右二十米、四分ノ一基高

±/10 方向、四分ノ一基高以下ノ曳火破裂

-10/± 左十米、観測手方向

監視哨ノ観測

+100 遠ク百米着發

-70_± 近ク七十米曳火

-150_± 近ク百五十米曳火東葉近シ

射撃演習

射擊演習

-60_ソ 近ク六十米曳火束藁長シ

-20_ソ 近ク二十米曳火束藁遠シ

-10_ソ 近ク十米ニテ跳飛シ破裂點見エス

目標順次 各目標ニ對シテ射撃セシ順次ヲ記入シ但大隊射撃ニ在リテハ各中隊ノ射撃シタル目標順次ニ關セス大隊一般ノ射撃シタル目標順次ニ從フ

齊射時間 同一速度ヲ以テ發射シタル彈數ヲ一括トシ記入ス

齊砲平均點 同一ノ射距離若クハ信管距離ニテ發射シタルモノヲ一括シ

テ記入ス

効力 命中數人馬ノ區畫ニハ人員及馬匹ニ命中セル彈子破片等ノ合計ヲ記入ス而シテ馬匹ニ命中セル數ハ()ヲ附ス

被彈人馬百分數ノ區畫ニハ被彈人馬數ヲ其總人馬數ニテ除シ其商ニ一百分乗シ、ルモノヲ記入ス

目標ノ種類、配置及効力ノ景況 目標ノ順次ニ從ヒ目標ノ種類、員數及配置法ヲ記入シ尙配置セシ略圖ニ彈痕ヲ記入ス但略圖ハ之ヲ粘附スルモ妨々無シ

彈痕ハ全彈〇彈子●破片×ヲ以テ示ス

以上ノ他殊ニ必要ナル事項ハ其要ヲ摘ミ備考欄ニ記入ス可シ
代用彈ハ其効力ヲ記入スルコト無シ

監的哨及放列哨ノ勤務

射擊演習

第二百七 射撃ヲ施行スルニハ監的及放列ノ二哨ヲ編成シ各一名ノ士官ヲ以テ其長トス而シテ其人員ハ射撃ノ前日統監之ヲ定メ尙監的哨長ニ目標ノ種類員數及設置ノ方法等ヲ示ス可シ

第二百八 監的哨長ハ目標ヲ設置シ彈着點、破裂點ノ距離及爲シ得レバ目標前ニ破裂スル曳火彈束藁ノ目標ニ對スル景況ヲ觀測シ且其効力ヲ調査シ助手ヲシテ之ヲ原表ニ記入セシム而シテ其距離ノ觀測ヲ確實ナラシムル爲メ目標ノ前後ニ若干ノ標杭ヲ植立ス可シ

第二百九 放列哨長ハ射彈ノ方向及破裂點ノ觀測ヲ爲シ且射撃速度ヲ調査シ助手ヲシテ之ヲ原表ニ記入セシム而シテ破裂高ノ觀測ヲ確實ナラシムル爲メ基高桿ヲ用ヒ其整數及分數ニ由リテ之ヲ測ルモノトス號令報告及中隊長ノ觀測等ハ別ニ助手ヲシテ記載セシムルモノトス

第二百十 監的哨ハ示號標(第六圖)ヲ以テ射撃準備ノ成否ヲ通報ス

其法示號標ヲ植立スルハ射撃スルモ危險無キヲ表シ之ヲ倒スハ射撃ス可カラサルヲ表ス放列哨ニ在リテモ亦發射前ニハ必ス示號標ヲ植立シ射撃終レハ之ヲ倒ス

二個以上ノ監的所ヲ使用スルトキハ放列ニ近キ監的所ハ之ヨリ遠キ監的所ニ於テ示號標ヲ植立スルヲ認メタル後之ヲ植立ス可シ
放列及監的兩哨長ハ各一名ノ兵卒ヲシテ互ニ示號標ノ起伏ヲ監視セシム可シ

射撃上ノ警戒

第二百十一 射撃演習ヲ行フ前聯隊長ハ豫定日時及場所ヲ地方廳ニ通知シ尙射撃間交通ヲ遮斷ス可キ道路並ニ危險アル方位等ヲ射撃場附近ノ郡市役所、町村役場、憲兵屯所及警察署ニ豫メ通報スベキモノトス

射擊演習

百

第二百十二 射線ノ方向ハ射擊場接近村落等ニ危害ヲ及ホサル如ク撰定スベシ要スレハ一定ノ標識ヲ設ケ危害ヲ及ホスベキ虞アル方向ヲ標示スベシ

射擊スル部隊ノ小隊長以上ハ危害ノ虞アル方向ヲ熟知スルヲ要ス
榴彈ヲ射擊スルトキハ射線ヨリ五百米以内ヲ危險界トス

第二百十三 射擊ヲ始ムルニ先タチ射擊場中最モ認認シ易キ位置ニ赤旗ヲ揚ケ一般人民ニ射擊アルコトヲ知ラシムルヲ要ス

第二百十四 射擊中一般人民ノ射擊場内通行ニ關スル規定ヲ場内道路ノ入口ニ揭示シ置クモノトス

射擊目標ヲ設置スル位置及彈着スベキ虞アル地域内ニ入ル道路等ニハ警戒哨ヲ配布シ或ハ假ニ阻絶ヲ設ケ又ハ附近民有地ニ在ル者ニ危害ヲ加フルノ虞アレハ射擊中之ヲ避ケシムルヲ要ス

第二百十五 警戒哨ハ通常士官ヲ以テ其長トシ之ニ必要ノ下士兵卒ヲ屬スルモノトス時宜ニ由リ射擊場ノ地形之ヲ許ストキハ的監督長ヲシテ警戒哨長ヲ兼ネシムルコトヲ得

第二百十六 當日第一ニ射擊スベキ部隊ハ射擊前號砲一發ヲ放チ以テ近傍村落ノ人民ニ注意ヲ與フベシ

報 告

第二百十七 聯隊長ハ射擊演習前射擊演習日課豫定表第三表ヲ製シ之ヲ師團長(旅團内ノ聯隊ニ在リテハ當該旅團長ヲ經テ)ニ進達ス師團長ハ之ヲ教育總監ニ進達スルモノトス而シテ其書類ハ演習施行ノ一月前教育總監部ニ到達スルヲ要ス

第二百十八 演習中隊長ハ毎回射擊終レハ射擊成果表一葉ヲ製シ之

射擊演習

百一

射撃演習

ヲ統監ニ呈ス但大隊以上ノ射撃ニ在リテハ順序ヲ經テ之ヲ統監ニ呈ス
 統監ハ射撃成果表ヲ點檢シ順序ヲ經テ之ヲ聯隊長ニ呈ス
 聯隊長ハ閱覽ノ上之ヲ返付ス

第二百十九 聯隊長ハ射撃演習後左ノ書類ヲ師團長（旅團内ノ聯隊

ニ在リテハ當該旅團長ヲ經テ）ニ進達ス

地方ノ狀況ニ關スル報告

演習實施表（第四表）

演習及兵器一般ニ關スル意見

師團長ハ陸軍大臣ニ地方ノ狀況ニ關スル報告並ニ演習及兵器一般ニ關ス
 ル意見ヲ教育總監ニ演習實施表並ニ演習及兵器一般ニ關スル意見ヲ進達
 スルモノトス而シテ其書類ハ十二月下旬マテニ陸軍省、海軍總監部ニ到
 着スルヲ要ス

第一表

各科成績ニ應スル點數表

科目	點數
表尺ヲ以テスル	20
照準	19
弧照準機ヲ以テスル高低照準	13
三番砲手ノ行フ方向照準	7
	16
	15
	14
	13
	12
	11
	10
	9
	8
	7
	6
	5
	4
	3
	2
	1

備 考 本表ノ誤差ハ其點數ニ應スル最大限ヲ示スモノナリ

第二表 (用紙美濃紙)

年 號		撰 拔 照 準 手 列 序 表		第 何 中 隊 長 何 某 印				
月	日	表尺ヲ以テスル照準	弧形照準機ヲ以テスル高低照準	三番砲手ノ行方照準	總點數	列序	入營年期	姓 名
19	19				57	二	何年	一等卒 何某
19	19				58	一	何年	上等兵 何某

第三表 (用紙美濃紙)

(本雜形ノ二倍大ニ課製ス可シ)

備 考	明 治 年 射 擊 演 習 日 課 豫 定 表												野 戰 砲 兵 第 聯 隊				
	日 後	日 前	日 後	日 前	日 後	日 前	日 後	日 前	日 後	日 前	日 後	日 前	日 後	時 分	演 習 動 務	種 類	要 項
																第 一 大 隊	要
																第 二 大 隊	要

圖 四 第

用 標 目

色鼠濃的面高車砲

一分十二字約尺梯

立姿棚面板的
(黑色)

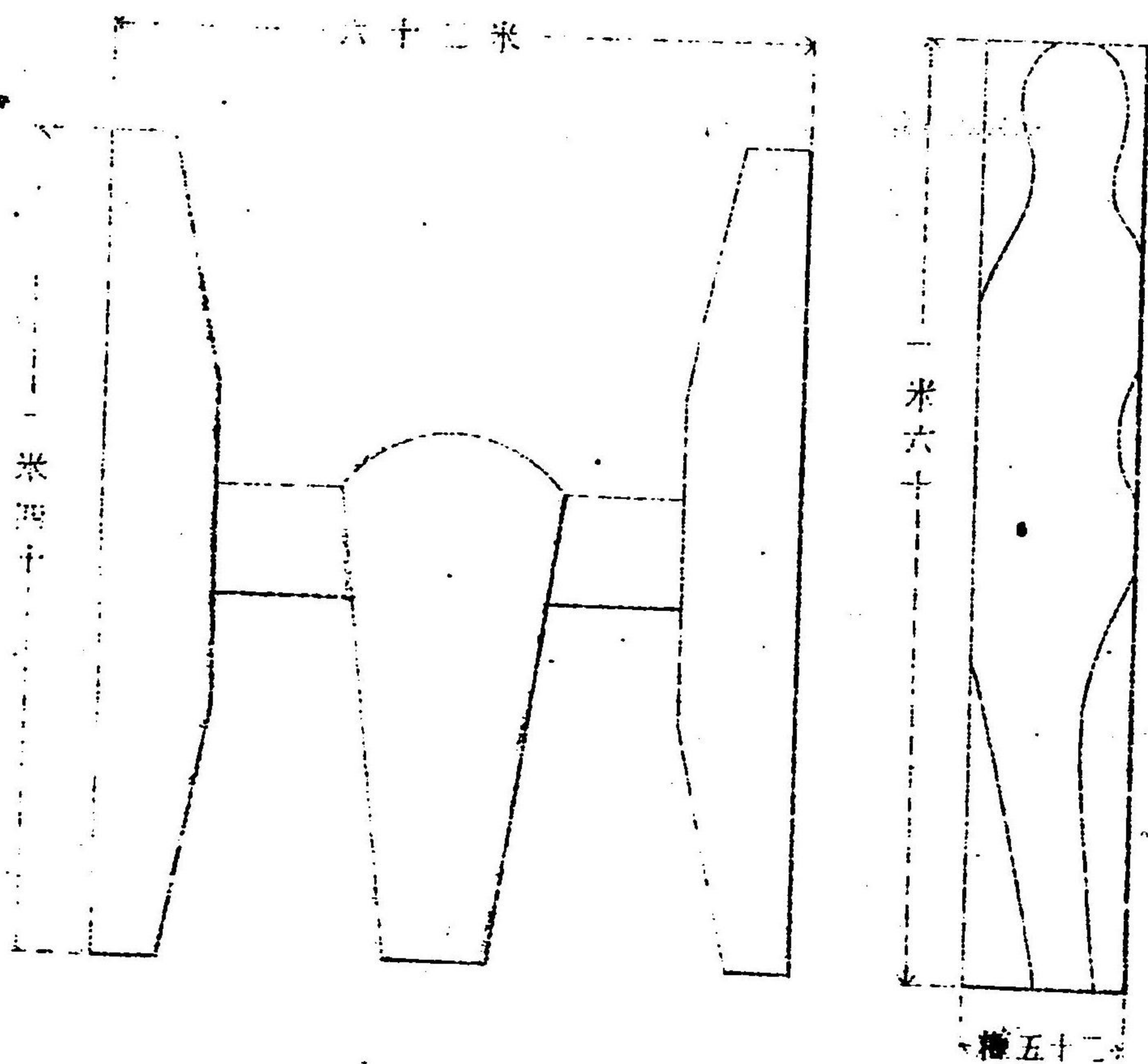


圖 三 第

照門上三於
ケル照星及
照準無ノ投影

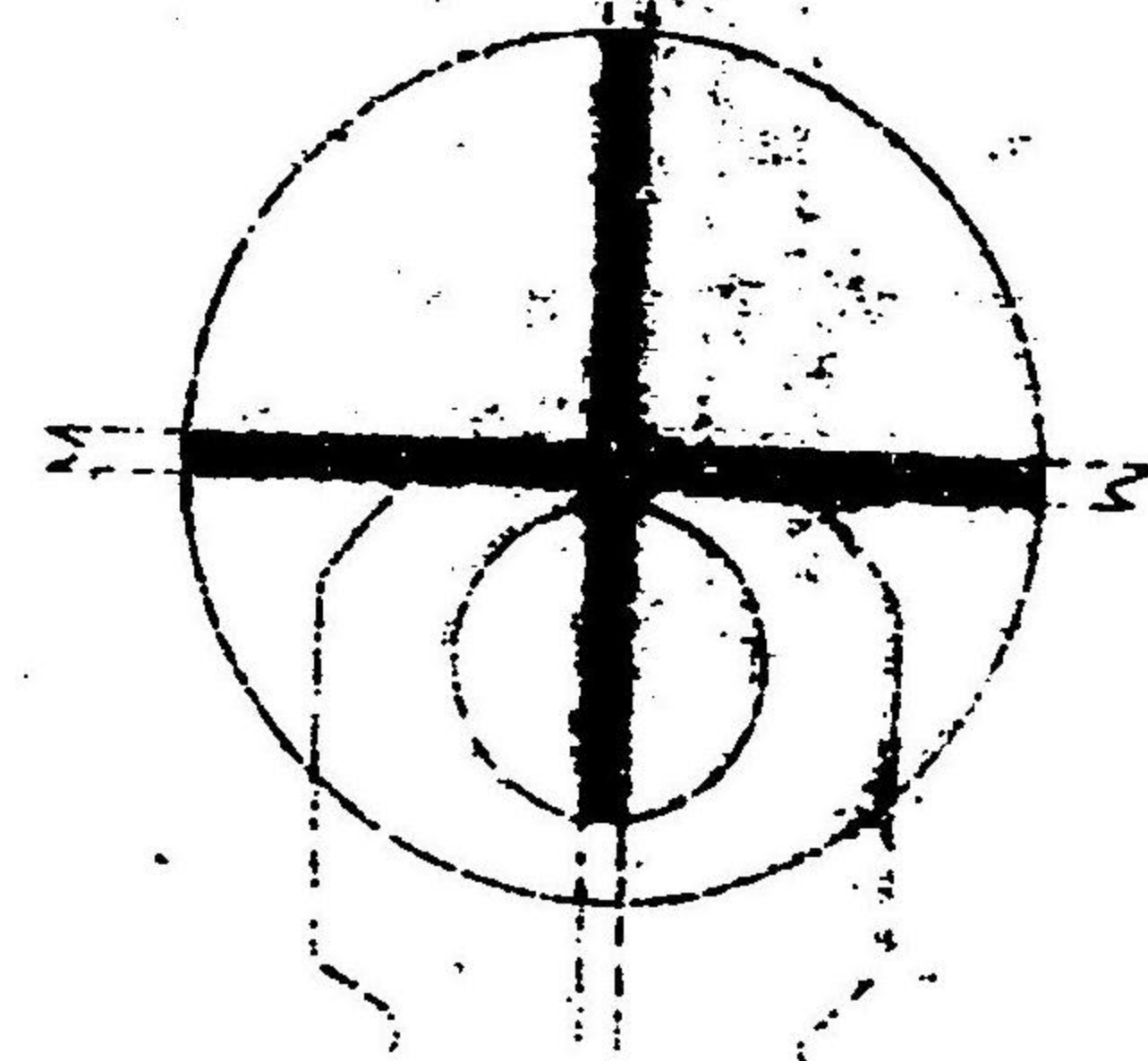
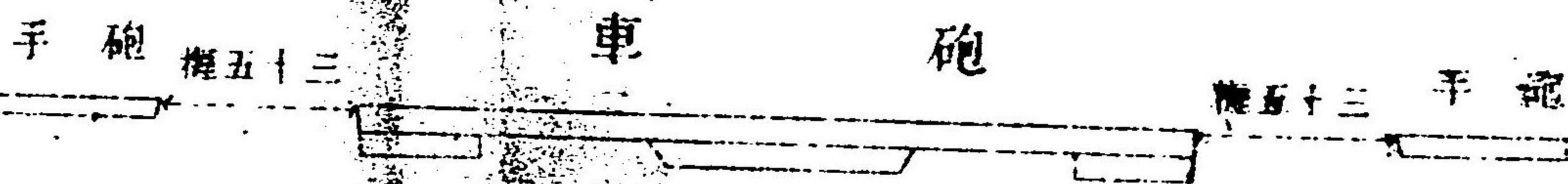


圖 視 準 / 置 設 標 目



明治四十年九月一日印刷
明治四十年九月五日發行

(定價金十錢)

翻刻兼
發行者

栗本長七

東京市小石川區豐川町十五番地

印刷者

三原松皆治郎

東京市京橋區本湊町十三番地

印刷所

三原松印刷所

東京市京橋區本湊町十三番地

東京市小石川區豐川町十五番地

發行所

一一二二館



特71

678

301261-001-4

特71-678

野戰砲兵射擊教範 改正草案

M40. 11

BFB-0001

